

西洋古典籍を巡る書誌と資料研究法の現在  
Present stage of Descriptive Bibliography  
and archival research on Western rare books

高野 彰・中井えり子

ミニ・シンポジウム趣旨説明 長尾伸一

Akira TAKANO, Eriko NAKAI

Purpose of the symposium by Shinichi NAGAO



# 西洋古典籍を巡る書誌と資料研究法の現在

高野 彰・中井えり子

ミニ・シンポジウム趣旨説明 長尾伸一

Present stage of Descriptive Bibliography and  
archival research on Western rare books

Akira TAKANO, Eriko NAKAI

Purpose of the symposium by Shinichi NAGAO





## 目次

ミニ・シンポジウム「西洋古典籍を巡る書誌と資料研究法の現在 — 『水田文庫貴重書目録補遺；水田珠枝文庫貴重書所収』を中心に」趣旨説明 .....	長尾 伸一 5
折記号が示す洋古書の姿.....	高野 彰 7
西洋古典籍目録作成の実際：名古屋大学の事例.....	中井 えり子 24

## Table of contents

Purpose of the symposium “Present stage of Descriptive Bibliography and archival research on Western rare books” .....	Shinichi NAGAO 5
Old Western books indicated by signatures .....	Akira TAKANO 7
Cataloguing Western old and rare books: the case of Nagoya University Library .....	Eriko NAKAI 24



ミニ・シンポジウム  
西洋古典籍を巡る  
書誌と資料研究法の現在



—『水田文庫貴重書目録補遺；  
水田珠枝文庫貴重書所収』を中心に—

- 14:00-14:10 趣旨説明
- 14:10-14:50 『水田文庫貴重書目録補遺；  
水田珠枝文庫貴重書所収』編集後記  
松波 京子（名古屋大学大学院 経済学研究科招へい教員）
- 14:50-15:30 西洋古典籍と大学図書館  
—名古屋大学での体験から書誌を中心に—  
中井 えり子（元名古屋大学経済学研究科研究員）
- 15:30-15:40 休憩
- 15:40-16:20 折記号が示す洋古書の姿  
高野 彰（元跡見学園女子大学教授）
- 16:20-16:50 全体討論
- 司会進行 隠岐 さや香（名古屋大学大学院経済学研究科教授）

西洋古典籍は、一冊一冊が独自の顔を持っています。まったく同じ本はありません。しかし、ただタイトルを目録に記載するだけでは、そうした違いは見えません。目録に詳細な書誌情報を盛り込むことが重要です。その実例が、2021年3月に発行された『水田文庫貴重書目録補遺；水田珠枝文庫貴重書所収』です。

このシンポジウムでは、西洋貴重書の目録がどのように作成されているのか、また図書館で作成されている西洋貴重書の書誌情報はどのように作成されてきたのか、またその情報が今後の研究にどのように生かされる可能性があるのか、実際に実務に携わった経験者が紹介します。参加者の皆様の今後の研究、実務のご参考になれば幸いです。

2022.1/22（土）14:00-17:00  
オンライン開催（13:45 接続開始）

参加定員 250名（申込受付順）  
参加費 無料（接続にかかる通信費は受講者にご負担ください）

参加申込 以下の申込フォームから登録してください。  
<https://hrs.ad.hit-u.ac.jp/v33/entries/add/449>

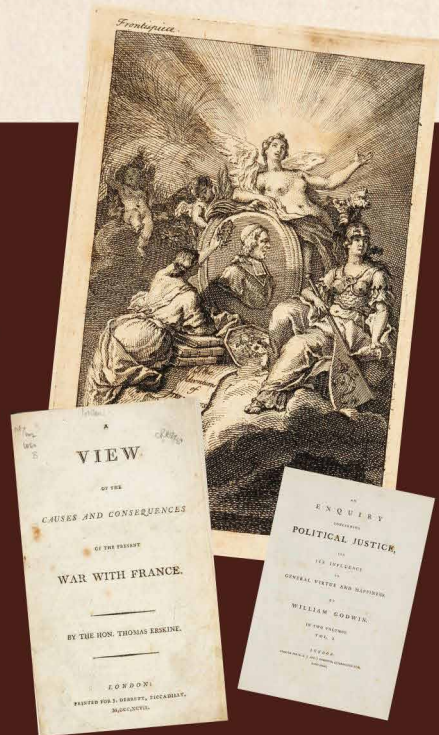


申込期限 2022/1/17（月）  
（ただし、定員に達し次第、受付を終了します）

お問合せ 一橋大学社会科学古典資料センター  
MAIL: [chssl@ad.hit-u.ac.jp](mailto:chssl@ad.hit-u.ac.jp)  
TEL: 042-580-8248

主催：「啓蒙の言説圏と浮動する知の境界：  
貴重書・手稿・デジタル資料を総合した18世紀研究」  
（科研費基盤研究B）研究グループ

共催：一橋大学社会科学古典資料センター



図版：名古屋大学附属図書館所蔵本

## ミニ・シンポジウム

### 「西洋古典籍を巡る書誌と資料研究法の現在—

### 『水田文庫貴重書目録補遺;水田珠枝文庫貴重書所収』を中心に」趣旨説明

#### Purpose of the symposium “Present stage of Descriptive Bibliography and archival research on Western rare books”

このミニ・シンポジウムは、タイトルにもありますように、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究（B）「啓蒙の言説圏と浮動する知の境界：貴重書・手稿・デジタル資料を総合した18世紀研究」（研究代表者：一橋大学・小関武史教授、研究課題番号：19H01200）研究グループの活動の一環として開催いたしました。

日本でも和文献を中心に、デジタル・ヒューマニティという視点から、デジタル時代の新しい資料研究法が開発されています。それら和文献資料は日本独自の資料ですが、西洋古典籍、特に近代思想に関する古典籍に関しても、日本はおそらく東アジアでも有数のコレクションを持っている国といえます。もちろん西洋近代思想史の資料の大半は外国の貴重図書室で調査できるわけですが、日本にしか存在しないものも含め、この分野の多くの優れた資料が、一橋大学を中心に名古屋大学、慶應義塾大学、東京大学などの図書館に所蔵されています。我々の研究会は、外国の先行研究やデジタル資料も使いつつ、日本に所蔵される西洋の近代思想史に関わる古典的な資料を発見・再検討し、研究方法を開発しつつ、西洋近代思想史に関する新しい視角や、あるいは思想の多様性を見出していくことをテーマにしています。なおこの研究会メンバーの多くは日本18世紀学会に属する啓蒙研究者ですので、18世紀に関する思想史研究の現段階については、現在本学会が編集し、2022年秋以後出版予定である『啓蒙思想の事典（仮題）』を読んでいただければ、全体像を見ていただけます。

このような新しい研究にあたって重要なのは、研究者とライブラリアンの方々との協力であろうと思います。とりわけて我々が注目しているのは、刊本や草稿を中心としたモノとしての資料、デジタル化する前の資料をどう見ていくのかということです。デジタル的な情報は原資料を人間がデジタルした結果ですので、そこでスクリーニングされています。しかしモノとしての資料はあくまでも個物としてのモノであり、全てがデジタル化できるわけではありません。それらは実はデジタル化から零れ落ちた様々な情報を持っています。研究でのそれらの活用の仕方を探求し、さらにはそれらをさらに整理し、デジタル的な形に変換していくことなどで、どのような新しい研究の方向性が出てくるのかが、この研究グループの関心のひとつであります。そのような意味で、ライブラリアンの方々と研究者とが協力し、お互いにいろいろな知恵を出し合って、資料整理の仕方、特に図書館が持っているモノの研究、整理、そして情報をそこからどうやって取り出すのかを研究する必要があるかと思っています。

この研究会ではすでに一度、対面の形で、一橋大学社会科学古典資料センターのご協力を得てシンポジウム「書物の記述・世界の記述 一書誌が描く18世紀啓蒙の世界」（2019年12月

20日開催、於一橋大学佐野書院)を開催しておりますが、今回は遠隔方式での開催となりました。名古屋大学附属図書館は水田文庫、ホップズ・コレクションを中心に貴重な資料を所蔵しております。同図書館にはこれらを単に管理・保蔵するだけでなく、整理するにあたって、古典文献資料の整理の仕方、カタログ化、そしてどのように情報をうまく収集すれば研究等に役立つのかを検討してきた蓄積がございます。本日の講演は長年にわたって資料の調査をされた高野先生、中井さんをお招きして、これに関する現在のひとつの到達点を、名古屋大学附属図書館の資料を中心に明らかにしたい、というのが本日の趣旨でございます。

現在大学図書館は非常に厳しい財政状況下にあります。その中でも今まで先輩方が開拓してきた資料整理の方法、公開の方法、そういったものを受け継ぎながら共有し、できれば少しでも発展させていくことが、現在の我々研究者やライブラリアンの方々にとって重要なことであるかと思います。そのような機会の一つとして、一橋大学社会科学古典資料センターのご協力をいただき、本日のシンポジウムを開催する運びとなりました。

今後も図書館や大学を巡って厳しい状況が続くことが予想され、楽観的なことは言えませんが、しかしその中でモノとしての資料の重要性とその整理の仕方、そしてそれをデジタルに結びつけていくという大切な方法の探求を続けていかなければならないですし、そのためには、一図書館だけではなかなか困難ですので、われわれの研究会が研究者も含めライブラリアンの方々が協力していく一つのハブとなることができれば、このようなシンポジウムを開催することには価値があるのではないかと考えております。今後もこのような会合を継続開催していければと考えておりますので、本日参加していただいた方々には、是非今度とも我々と交流しつつ、モノとしての資料、特に我々は西洋ではありますが、図書館が持っているモノとしての資料をどう整理し、どう使い、デジタルの時代にどう生かすのかを探求する作業をご一緒できればと考えております。

長尾 伸一

Shinichi NAGAO

※本研究は JSPS 科研費 JP19H01200 の助成を受けたものです。

※なお、本シンポジウムでの松波報告「『水田文庫貴重書目録補遺：水田珠枝文庫貴重書所収』編集後記」については、以下の内容がベースとなっております。ご関心のある方はぜひご覧下さい。

中井えり子・松波京子「『水田文庫貴重書目録補遺：水田珠枝文庫貴重書目録所収』編集後記」、『名古屋大学附属図書館研究年報』第19号、2022年3月発行、pp.37-51.

<https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/2002340#.YnnHGOjP3Vg>

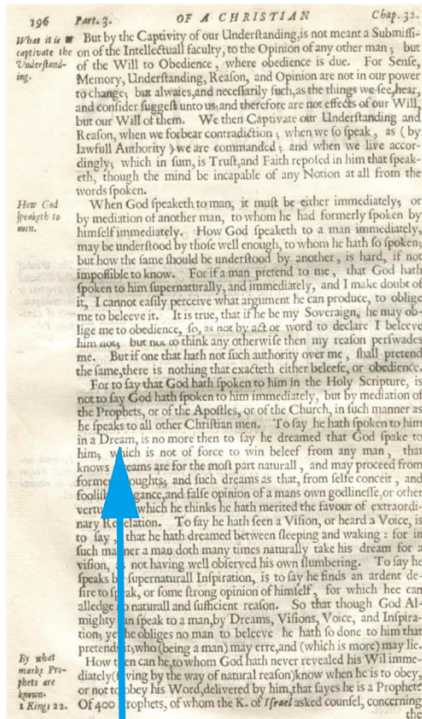
# 折記号が示す洋古書の姿

## Old Western books indicated by signatures

高野 彰  
Akira TAKANO

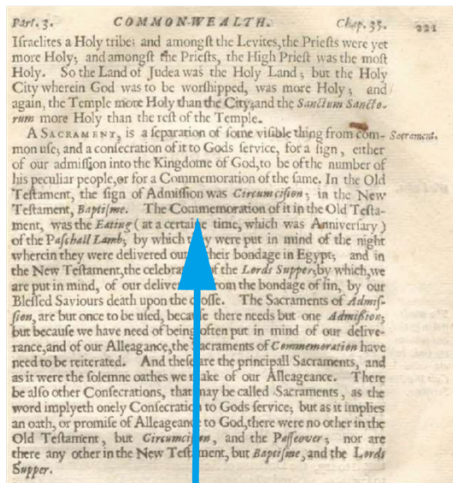
### 1. 序：同じ本でも異なっている

洋古書は現代本と比べると大きな違いがある。現代本は動力印刷機で刷るため、変更が見つかっても機械を止めて修正するのでは効率が悪い。組置きにしておいてまとめて修正するので、出来上がりが同じになる。そのため現代本はどれか1冊を手に入れば、残りの同じ本の代表になれる。



Dream

図1：繰り返し使われた活字 m  
2C1' (名古屋大学附属図書館)



Commemoration

図2：繰り返し使われた活字 m  
Ff2' (名古屋大学附属図書館)

それに対して洋古書は印刷工程が違っていた。洋古書は手引き印刷機で印刷し、印刷が終わると組置きにしないで「直ぐ」に解版し、活字を再利用していた(注1)。例えば、*Leviathan* (1651



年)の後半で活字「m」(図1と図2)が折丁2C-2Z1の間で使われている(注2)。同じ活字が印刷—校正—解版—組み版—印刷という順序で繰り返し使われた証拠である。従って洋古書の場合、校正は折丁ごとにすぐ行われた。そうしないと修正の機会がなくなってしまうからである。Leviathanが出版される頃、著者ホッブズはパリにいた。印刷はロンドンのトマス・ワレン(Thomas Warren)の印刷所で行われたので(注3)、印刷直後の校正は出来ない。修正や変更はまとめて提示するしかなかった。それがLeviathanのA3の裏ページにある正誤表である。ホッブズの校正は即日ではなかったが、印刷所内での校正は行われている。折記号A4の表ページでの誤植訂正がそれである。このページの見出しはイタリックでTHE INTRODUCTIONと表示する予定であったが、THEをローマンで組んでしまった本がある(図3)。間違いに気付き、THEをイタリックで組み直した本もある(図4)。それに図3では下部欄外に間違っ折記号Bを印刷してしまっているが、図4ではそれが削除されている。

もう一つ示してみよう。図5と図6はJames BurghのPolitical disquisitionsの第3巻(1775年)である。この本のK折丁の2枚目の紙葉にはK2の折記号がついている(図5)。しかし折記号が\*K2となっている本もある(図6)。K2の紙葉を削除し、文章を書き替えた\*K2の紙葉

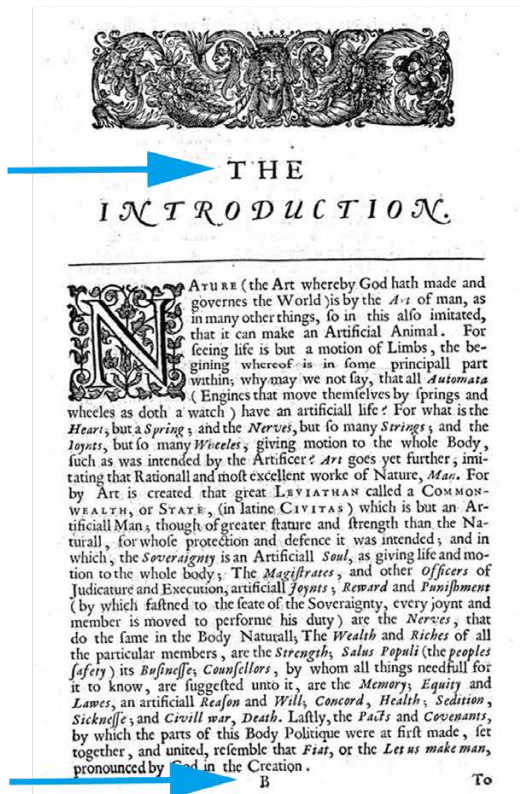


図3: *Leviathan*, 1651。A4'の修正前  
(名古屋大学附属図書館)

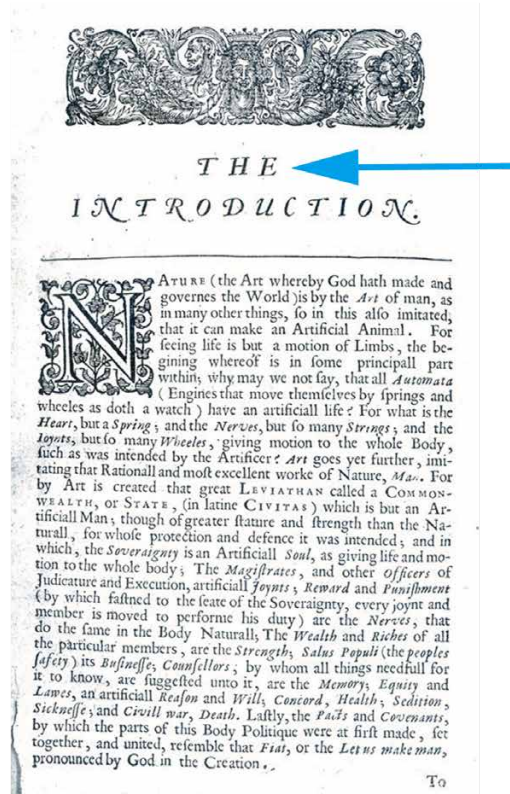


図4: *Leviathan*, 1651。A4'の修正後  
(名古屋大学附属図書館)

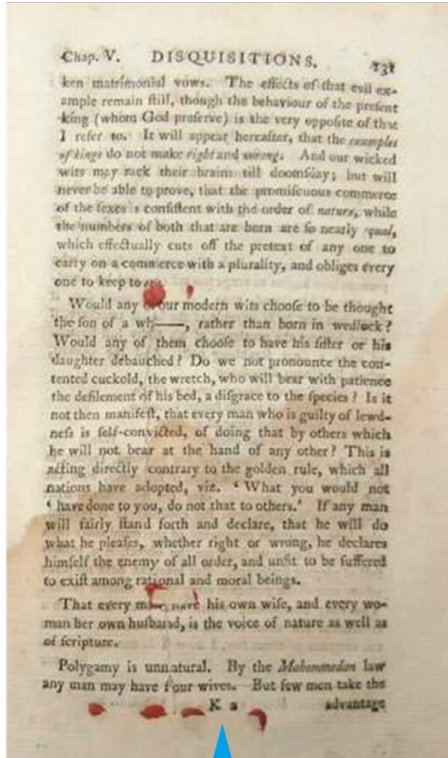


図5: *Political disquisitions* 第3巻のK2  
(名古屋大学附属図書館)

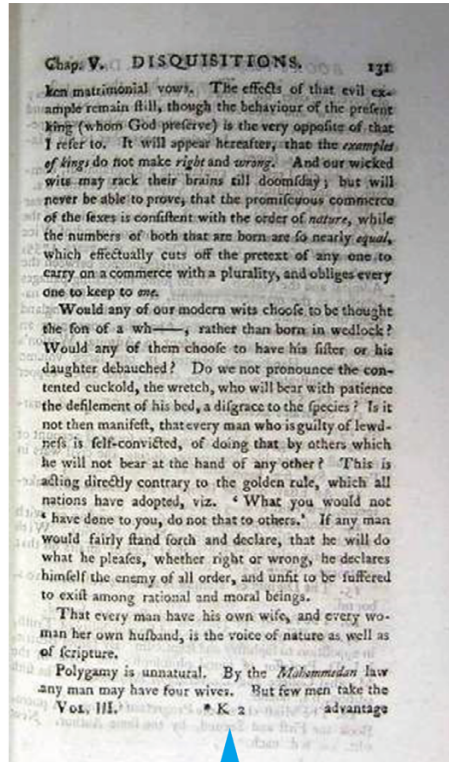


図6: *Political disquisitions* 第3巻の\*K2  
(名古屋大学附属図書館)

と差し替えられた本もある。

校正には大規模なもの小さなものがある。前者の例としては前述の *Political disquisitions* がある。この本の修正前は1ページに32行(図7)であったが、修正後は30行(図8)に文章が減っている。ここまで大きな修正は著者の主張にかかわることが多いので、既に刷り上がった紙葉を差し替えて主張の統一を図るはずである。にもかかわらず、未修整の本(図7)が見つかる。未修整の紙葉が徹底して回収されないどころか、逆にそれらも使って本として束ねられている。校正の統一が問われる反面、おかげで著者の思想の変化を捉える機会にもなっている。

もう一つの手直しが *Leviathan* のように小さな修正である。通常は校正で直されるが、時には印刷機の稼働中に間違いに気付き印刷作業を中断して修正する「稼働中断修正(stop-press-correction)」もある。これを異刷(state)という。スペル間違い、表記間違い、ノズル付け違い、フォント違い、オーナメントの使用間違いと言った小さな修正であり、本文の主張に影響を及ぼしたりしない内容のことが多い。そのためこうした修正は気付けば直すが、既に刷り上がっている紙葉まで修正するほどではないという緩い考え方をしている。洋古書のどれか1冊を手



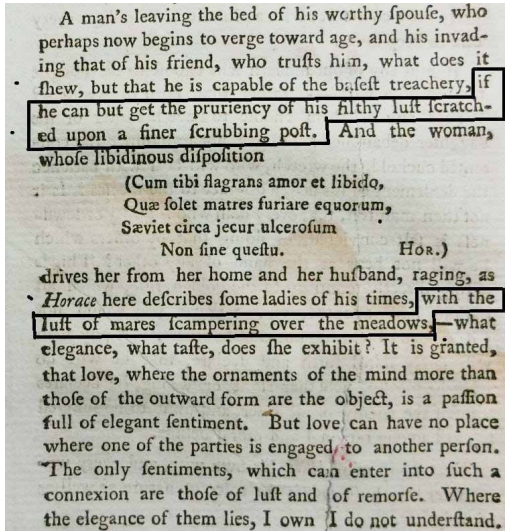


図7: *Political disquisitions*  
第3巻のK2'の削除予定の部分  
(線で囲った部分)  
(名古屋大学附属図書館)

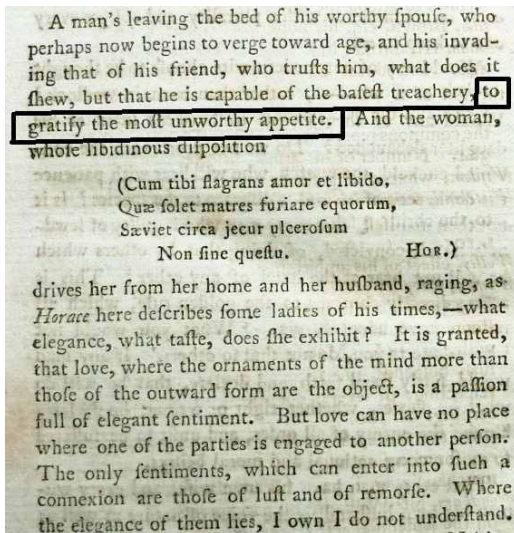


図8: *Political disquisitions*  
第3巻の\*K2で、削除後に文章を追加した部分(線で囲った部分)  
(名古屋大学附属図書館)

にしても、他の同じ本の代表になれないのにはこうした理由がかくされていたのである。名古屋大学附属図書館の水田文庫やホップズ文庫はこうした本の宝庫であり、本稿で取り上げる例もそこからの借用である。

こうした本を前にしたとき、目録は本を書名+著者名+ページ数+出版年を持って識別し、本全体を一つの塊としてとらえて表示する。しかしこれでは洋古書の変動の様子を表示することは出来ない。そこで識別の精度を上げるために「1紙葉単位」に表示すると共に「本の紙葉全体を一覧」できる方式を採用した。折記号を使った表記法(校合式)である。こうした表示をしなくても、紙葉の異同は文章で説明出来る。しかし一覧は出来ないのも、全体像をつかみにくい。本を識別表示する時、校合式の利便性を上回る表示方式は現在のところない。例えば、



図5と図6に示したK折丁の変動の様子は

$K^8(-K2 + *K2)$  そして巻末では  $Kk(Kk1.4, Kk2.3(-Kk3=*K2))$

と記述すれば、K折丁の2枚目の紙葉K2を削除し、代わりに\*K2が挿入されたことを示す事が出来る。しかも挿入紙葉(\*K2)がKk折丁で印刷されたことも一目でわかる。この点については第10項で扱う。

しかし変更が見つかって、紙葉単位の変更でなければ、変更の様子を折記号で表記することは出来ない。前述した *Leviathan* の THE (INTRODUCTION) の変更は紙葉の変更を伴わないので、こうした変更は注記で説明するしかない。

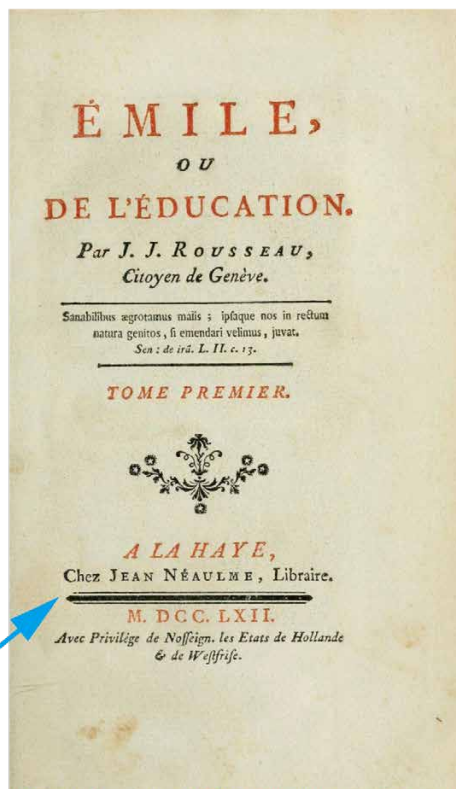


図9：中央揃えでない三筋罫  
〔『エミール』(パリ版) タイトルページ]

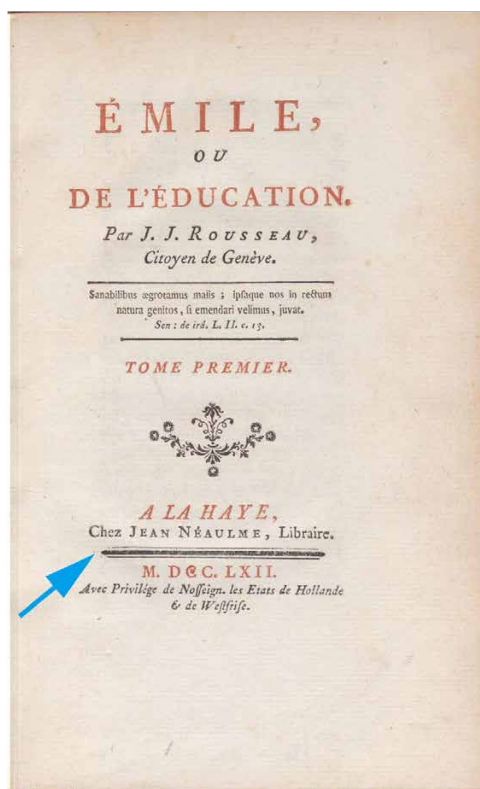


図10：中央揃えの三筋罫  
〔『エミール』(パリ版) タイトルページ]

もっともタイトルページで異刷が見つかった場合、異なった扱いをすることがある。ミルトン (John Milton) の『失樂園』(1667年)は初版第1タイトル、初版第2タイトルなどと言った名称を付けて区別することがあるからである。同じ事はルソー (J.J. Rousseau) の8折判『エミール』(パリ版)の第1巻タイトルページにも言えるかもしれない。この本では出版事項の中の三筋罫が中央揃えになっていない本(図9)と、中央揃えになっている本(図10)とがある。前者が最初の印刷であり、後者が後刷りになる(注4)。

## 2. 折記号の表示形

では紙葉単位に変動の様子を伝えることの出来る折記号とはどんな工夫で、どんな特徴を備え、どのように用いるのであろうか。

本を作るには大きな紙に複数のページを並べて印刷する。印刷後、それを折り畳むと一対の紙葉の束が出来る。これを折丁という。そしてこの束を順番に並べていくと本が出来るが、並べる作業を効率よく行うために折丁ごとに順番を示す記号が1つ付けられる。それが折記号である。この記号は折丁ごとに付けられ、折記号が異なれば別の折丁になる。

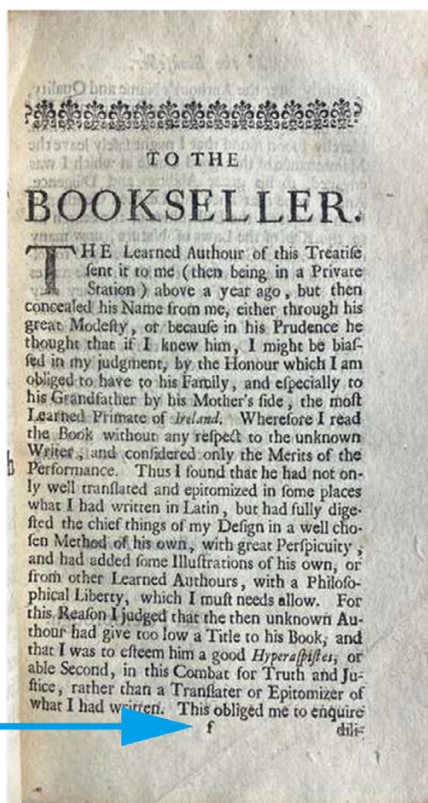


図 11 : pica の折記号 (f1)  
(名古屋大学附属図書館)

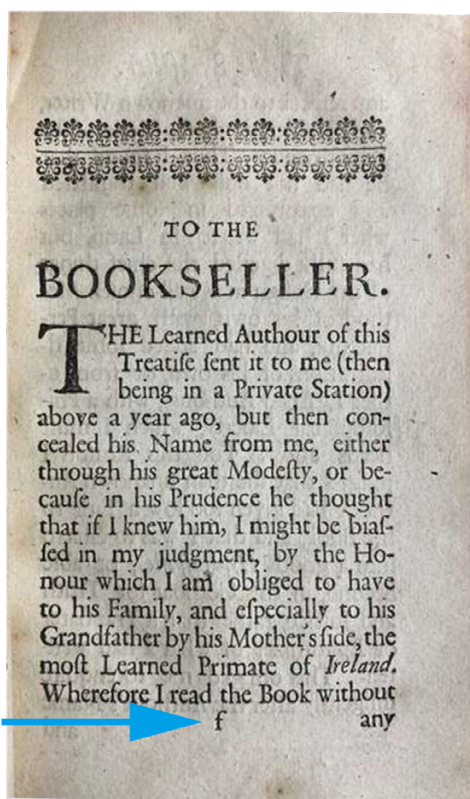


図 12 : great primer の折記号 (f1)  
(名古屋大学附属図書館)

折記号にはアルファベットや数字さらには記号類も使われている。A, B, C とか 1, 2, 3 などには識別機能と順番機能を備えている。しかし \*, †, ) (といった記号類は識別機能を備えていても、記号同士を順番に並べる機能はない。そのため、表示順が並び順になる。\*, †, ) (と表示されていれば、それが順番である。

折丁は折記号によって、紙葉はそれに加えて紙葉番号によって識別される。アルファベットには大文字と小文字があり、これらは別々の折記号となる。それに大文字あるいは小文字とい

う文字の形態は同じでも、ポイント数が異なれば、別の折記号となる。例えば、折記号が pica (図 11) と great primer (図 12) の小文字で表示されていれば、両者は別の折記号になる。折記号だけを見ても違いには気付きにくいかもしれないが、折記号はそのページの本文活字の大きさに合わせて表示されるので、折記号と同じ大きさの活字で本文ページが示されていれば、大きさの違いには気付くはずである (注 5)。但し、Aa、Aaa のような、大文字+小文字の形で折記号が表示される場合、小文字は大文字を使い切ったために使われたとみなす。そのためそれらを校合式に記述するとき、大文字の後に使われた小文字は大文字で記述し、AA、AAA のように記述することになる (注 6)。

### 3. 折記号の表示場所

折記号とは製本師が折丁を並べるのを助けるための工夫 (丁合取り) であり、本文ではない。そのため本文と区別して、ページの下部欄外の行に本文と同じ大きさの活字で表示される。この行にはページ数やつなぎ語も表示されることがある。これらは行の端に示すので、折記号はそれらと区別して、行の真ん中付近に表示されることが多い。図 13 では折記号の示された行の右隅につなぎ語が表示され、ページ数はランニング・タイトルの行にある。



図 13 : 折記号 (D1)

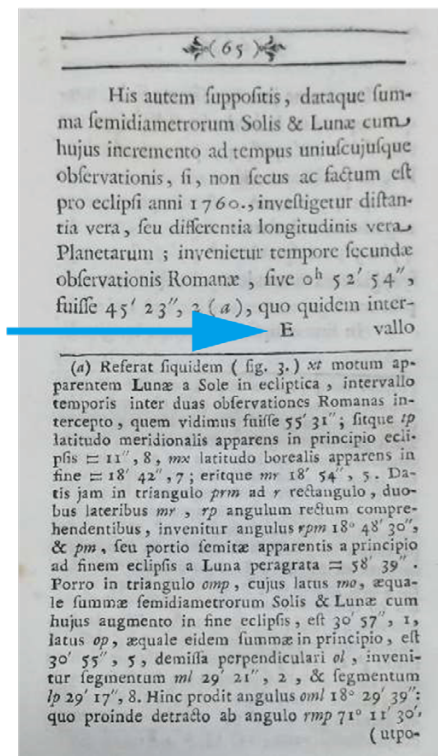


図 14 : 本文と注との間の折記号 (E1)



しかし表示場所が下部欄外であっても、最下行とは限らない。注記があったりすると、本文と注記との間に示されることもある。そうした場合、折記号が付いていないように見えるので、注意が必要である。その例が図 14 である。

#### 4. タイトルページの折記号表示

折記号は折り目でつながった 1 対の紙葉の左側の紙葉に表示されることが多い。しかし折り目の左側にあっても、折記号のほとんど表示されない特殊な紙葉のページがある。タイトルページである。なぜタイトルページには折記号がほとんど表示されていないのであろうか。

タイトルページは本文ページではない。しかし文字が印刷されていることから、本文ページに準じたページになる。加えてタイトルページには版面の中央で表示を整える「中央揃え」という表示原則がある。この原則にも従うことになると、折記号の表示位置は下部欄外の中央になる。その例が図 15 の折記号 A である。図では折記号を含めたすべての表示が中央揃えになっている。おかげで折記号 A は非常に目立った存在である。にもかかわらず、折記号はタイトルと無関係であるばかりでなく、一般の読者にとって意味不明な表示である。とって折記号はタイトルの関連情報でもないのに、図 16 の「(\*)」のように、遠慮して中央からずらして

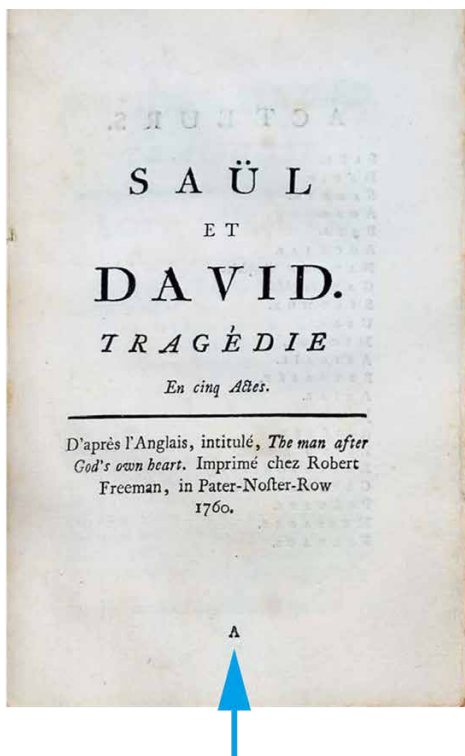


図 15：タイトルページで中央揃えで表示された折記号  
(名古屋大学附属図書館)

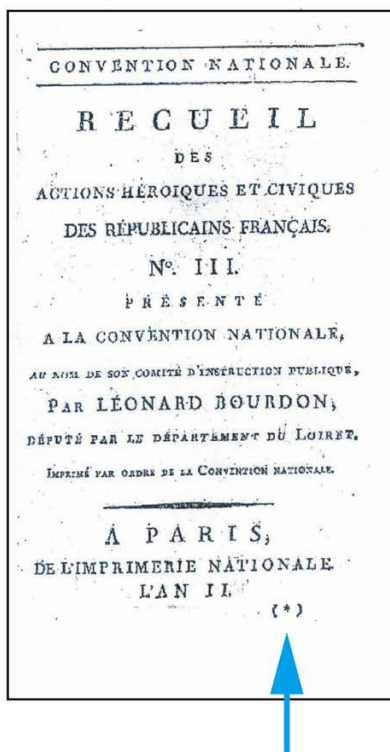


図 16：タイトルページで右寄りに表示された折記号

表示すると、「中央揃え」の原則をくずすことになり、これまた目立った表示になってしまう。折記号をタイトルページに表示するには問題が多いことがわかる。

本文ページの場合、版面いっぱい本文を表示するので、どのページも類似して見える。そのため、本文ページの折丁は折記号を付けないと素早く並べにくい。それに対してタイトルページは文字数が本文ページより少ないだけでなく、中央揃えで表示されているので、折記号を付けなくても容易に識別できる。こうしたことからほとんどのタイトルページは折記号なしで済ませ、折記号の表示されている例は少ない。

## 5. 白ページの折記号

そのほかにも折記号の表示されにくい紙葉がある。白紙である。白紙には折記号の表示規定がない。文字が印刷されていないので、下部欄外という場所が存在しないからである。白ページの多くには折記号が付いていないが、付いている場合でも、折記号の大きさ、表示場所は様々である。とは言っても、白ページへの折記号付けはタイトルページへのそれとは全く反対の形でなされている場合がある。タイトルページでは目立つと困る。それに対して、白ページでは小さく表示すると、見落とししかねないため、目に付くように表示されていることもある。図 17 はその 1 例であり、図 18 となると、遊びが入り、しっかりと目立っている。白紙に折記号が付いていれば、それは折丁中の必要な紙葉となる。しかし白紙に折記号が付いていなければ、白紙が折丁にとって必要な紙葉かどうかは綴じ目でのつながり具合などを調べて判断することになる。



図 17：白ページの折記号（Aaa1）  
（名古屋大学附属図書館）

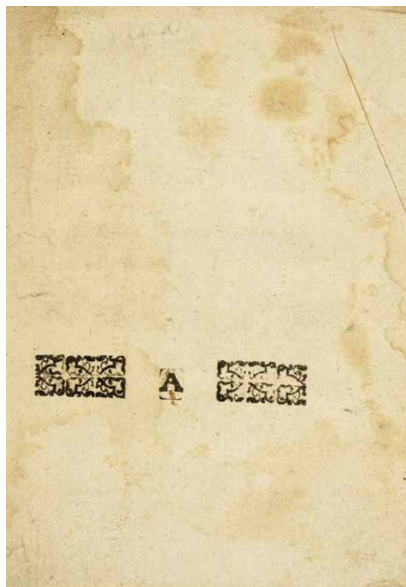


図 18：白ページの折記号（A1）

## 6. 1折丁1折記号1折り目：折丁の要件

図19は通常の手順で初めて印刷し、折り畳んで作られた8折判であるが、この図は色々の判型の折丁に共通する要件を示している。図の場合、折記号は1つ（A）である。紙葉数は8枚であるが、A1と[8]、A2と[7]、A3と[6]、A4と[5]は折り目でつながった1対の紙葉の状態にあり、しかもそれらは「1つの折り目で束ねられている」。

初めて印刷し、「折り畳んだ」とは、8折判であれば、1枚の紙を所定の手順で3回折り畳み、その折り目で束ねられた状態を指す。4折判であれば、2回折り畳み、折り目で束ねられた状態である。

折丁がこのように作られることから、この条件に基づいて折丁を折記号で表す規則が定められている。その代表的な表示が右肩数字を付けたA<sup>8</sup>である。従ってA<sup>8</sup>という表示にはこの項の冒頭で述べた条件がすべて含まれていることになる。1折丁、1折記号、1折り目であり、これが折丁の要件になる。そして1折丁はA<sup>8</sup>のように1表示で表し、2表示にはしない。2表示にすると、1つは別の折丁になってしまうからである。

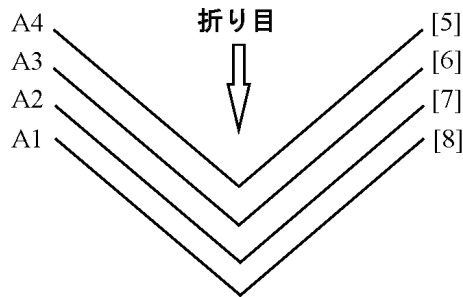


図19：折丁中の紙葉の姿

図19を表示するとA<sup>8</sup>になるが、A<sup>8</sup>と表示出来るのは1枚の紙を3回折り畳んで作る8折判だけではない。1対の紙葉が「通常通りに折り畳んで束ねられていれば」、2折を4つ重ねても（2° in 8's）、4折を2つ重ねても（4° in 8's）、16折の半裁（16° in 8's）であってもかまわない。ただし右肩数字は常に偶数でなければならない（注7）。

## 7. 1対の紙葉の折記号表示方法

紙葉が折り目でつながっていることを示す方法は2種類ある。折り目でつながった紙葉をまとめて表示するときは右肩数字を使う。それに対して各紙葉のつながっている様子を1枚ずつ視覚的に示すのがピリオドである（図20）。

A1.A2.A3.A4.[5].[6].[7].[8]

図20：紙葉のつながりをピリオドで表示

右肩数字、ピリオドの両表示とも紙葉のつながり具合がわかりにくいかもしれないが、総紙葉数の半分のところに折り目があると思えば、各紙葉のつながり具合は理解できるのではないだろうか。

### A3.A4.A5.[6].[7].[8]

図 21：紙葉番号 3 から始まる紙葉の表示

右肩数字は紙葉をまとめて表示するのに便利である。他方、ピリオドは紙葉の姿を 1 枚ずつ見せることができる。加えて、ピリオドは右肩数字では表示できない紙葉の状態を示すことも出来る。右肩数字は紙葉番号が 1 から始まる場合しか使えないが、ピリオドは紙葉番号が 1 から始まらなくても良いからである。

図 21 では折丁の紙葉番号が A3 から始まっているが、全体で 6 紙葉なので、上記のように表示すれば、各紙葉が折り目につながっていることを示すことが出来る。そしてピリオドで表示をしても、例えば図 21 であれば、この 6 紙葉が A<sup>6</sup> の「6」と同じ機能を果たしていることは言うまでもない。

右肩数字とピリオドはそれぞれに長短があるが、問題のない折丁の記述をするのにピリオドを使うと、手間がかかるばかりでなく、表示が長くなるので、表示スペースの無駄使いである。紙葉番号が 1 から始まっていれば、折丁の紙葉（数）は右肩数字で表示する方がよい。

折記号は折丁ごとに付けられるが、すべての紙葉に折記号が表示されることはない。折り目の右側の紙葉にまで折記号付けされている場合もあるが、多くは「折り目の左側の紙葉」に表示することですまされている。それを図示したのが図 19 である。図の場合、折り目の左側の紙葉には折記号が A1、A2、A3、A4 と表示されている。右側の 4 紙葉には折記号がないが、それらは折り目の左側の紙葉とつながっていることから、A5、A6、A7、A8 と呼ぶことが出来る。図 19 では折記号が左側の紙葉にすべて付いているが、左側の最初の紙葉に A とだけ表示され、それ以外の紙葉には折記号が表示されていなくても、最初の紙葉は A1、それ以降の紙葉は A2、A3、A4、A5、A6、A7、A8 と呼ぶことが出来る。この場合は 8 折であるが、2 折でも、4 折でもあるいはその他の判型であっても、折り目につながった紙葉の束であれば、折記号と紙葉番号の数え方は同じである。

折記号付けが折り目の左側の紙葉だけですめば、手間が省ける。しかしこの方法だと、図 24 の場合、1 つ目の束の折り目の右側の紙葉は折記号上で存在しない紙葉になってしまっている。従ってこの折記号付け法は 1 折丁 1 折り目の場合にのみ適用される特殊な折記号付け法といえる（注 8）。

## 8. 1 折丁 2 折記号 2 折り目：「後から」加えられた紙葉

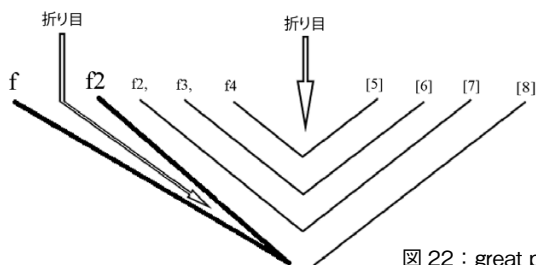


図 22：great primer **f** の紙葉が挿入された pica f 折丁

これまで折記号がどのように表示されているかを見てきた。しかし折丁が常に予定通りに作られているわけではない。紙葉がどのように作られているかを折記号を使って解決を試みてみよう。

折丁を調べていくと、妙な折記号付けに出会うことがある。*A brief disquisition of the law of nature* by James Tyrrell (1692) の pica f 折丁では、図 22 に示したように、折記号 **f2** が重複して付けられているように見える。

f f2 f2 f3 f4...

この折記号付けについては図 11 と 12 に示したように、活字の大きさが違うので、重複した折記号付けではなかった。

図を見ると、1 つ目の束は折記号 great primer **f** が付き、2 枚の紙葉が折り目でつながっていることから、折り目が 1 つある。2 つ目は 8 紙葉、1 折り目の pica f 折丁であるが、pica **f1** は削除されているために、8 枚目は折り目でつながっていない単独の紙葉になっている。great primer **f** は削除紙葉の pica **f1** と折記号文字が同じなので、削除紙葉の折記号を示すと共に、文字の大きさ変えることによって、pica **f1** とは別の折記号であることも示している。従って 1 つ目の束 (great primer **f**) は pica **f1** に対する差し替え紙葉であることが判る。前述の例では削除紙葉の折記号 K2 (図 5) にアスタリスクを付けて \*K2 (図 6) と表示し、挿入紙葉の折記号にしていた。図 22 ではその代わりに活字を大きくすることで、別の折記号にしていたことになる。

図 22 では折り目が 2 つ出来ていたが、1 つは後から追加された挿入紙葉の折り目なので、初めて作られた f 折丁は折り目が 1 つとすることになる。この点の詳細については注 8 を参照してほしい。

こうした折丁を折記号で表示する場合、最初に作られた折丁の全容を示し、次いで変更があればその様子を丸カッコ内に表示すればよい。

pica **f**<sup>8</sup>(-**f1**+**f**<sup>2</sup>)



図 22 の変動の様子は折記号の異同から判断できるが、その様子を目に見える形で示している折丁が見つかった。図 23 (注 9) である。図 23 には挿入予定の紙葉と削除予定の紙葉の両方が残っているからである。

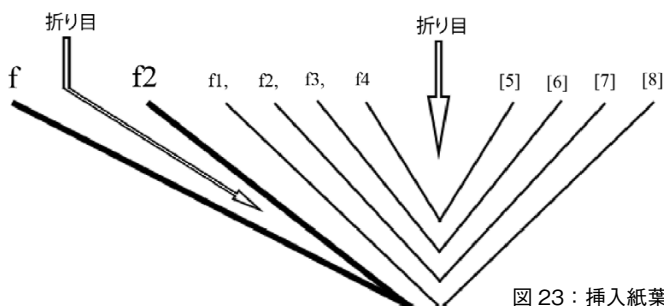


図 23：挿入紙葉と、削除予定の紙葉が表示された折丁

### 9. 1 折丁 1 折記号 2 折り目：現在の規則では表示できない折丁

図 22 では折記号の重複が疑われる例であった。今度はその逆に紙葉の存在を無視した折記号付けがなされている例である。その本とは *Elementa philosophica de cive*. Auctore Thom. Hobbes. Amsterodami, apud Henr. & Viduam Th. Boom (1742) であり、下記のような折記号付けになっている。

\*\* , [1 紙葉 ], \*\*2, \*\*3, \*\*4, \*\*5

問題の折丁は \*\* であり、折り目を含んだ形で示すと図 24 の通りである。図は 2 つの束からなり、折り目は 2 つある。しかし折記号は 1 つなので、1 折丁である。2 つ目の束は紙葉番号が 2 から始まっているが、すべて 1 対の紙葉なので、2 つ目の束には欠けた紙葉がない。1 つ目の束は 2 つ目の束のいずれかの紙葉を削除し、その代わりに挿入されたのではなく、最初から 1 つ目の束として作られていることが判る。

図 24 は 2 束、2 折り目であるにもかかわらず、1 折記号なので、「折丁の要件」とは異なる折丁になる。従って図 24 は既存の表示規則では対処できない折丁になる。

図 24 にはもう 1 つ問題になる部分がある。折記号付けである。2 つの束はいずれも「折り目の左側の紙葉」に折記号番号を付けている。おかげで \*\*2 という折記号 (と番号) は 2 つ目の束の 1 枚目 (実際には 3 枚目) に付けられ、1 つ目の束の 2 枚目の紙葉は折記号上は無視された紙葉にされてしまっている。「折り目の左側の紙葉」にのみ折記号付けする方法は 1 折丁 1 折り目の場合にのみ有効な折記号付け法であり、2 折り目の折丁には用いてはならない折記号付け法になる。この点からも現在の折記号表示規則が 1 折丁 1 折り目という前提で規定されていることが判る。図 24 の折丁については注 10 を参照してほしい。

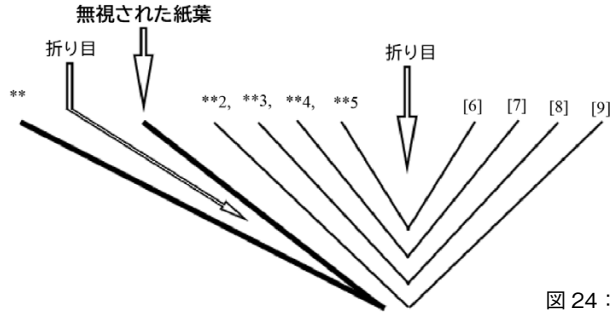


図 24 : 1 折丁 1 折記号 2 折り目

図 24 は 2 束のため 2 表示になってしまう。1 折丁は 1 表示なので、1 つの束として表示するには、両束共通の折記号を見出しにし、内訳を丸カッコ内に表示することで、同じ折記号の 2 束を 1 単位で表示出来る。

\*\*(\*\*2, \*\*2.\*\*3.\*\*4.\*\*5.6.7.8.9)

前述の 2 例は折記号付けの異常から、折丁の様子を解明できた。ところが次の例は折記号などを駆使しても折丁の様子を解明できない。それが *Political disquisitions* by James Burgh (1775) の最後の 3 紙葉である (図 27)。図 27 は本屋が出そうとした形なので、多くの本はこの折丁になっている。しかし幸いにもこの 3 紙葉の誕生を物語っている折丁の本が 1 点見つかっている。図 25 (注 11) である。

Kk 折丁は最初 4 折 (図 25) で作られたので、1 対の紙葉が 2 つ「重ね」られている。通常、これで折り畳みが完了し、本として綴じられるはずであった。ところがこの折丁の場合、更に一手間かけられた。「重ね」られた 1 対の紙葉を「並列」にし、さらに 1 紙葉を削除したからである。図で言えば、図 25 から図 26 への変更である。この例は Bowers が述べている「印刷型」(printing formula) と「発行型」(issue formula) に該当する。図 25 は四折で印刷した「印刷型」そして折丁中の紙葉を配置換えした図 27 は「発行型」になる (注 12)。

Kk 折丁は 1 対の紙葉 2 つを並列にしたことから、折り目も 2 つできてしまった。しかし折記号は 1 つなので、この折丁も図 19 とは異なった姿になっている。従って Kk 折丁も、図 24 と同様に、現在の表示規則では処理できない折丁になる。この折丁の詳細については注 13 を参照してほしい。

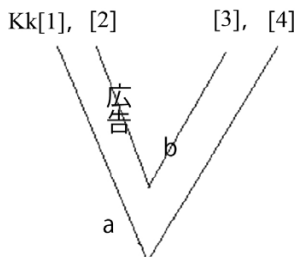


図 25 : 変更中 1

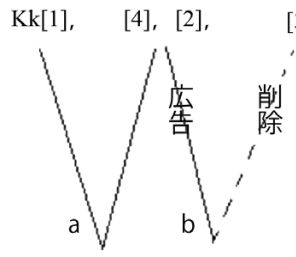


図 26 : 変更中 2

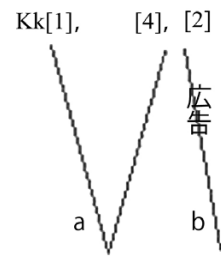


図 27 : 変更の完了

注 : 「削除紙葉」には \*K2 の折記号がある。

従って前述の *Elementa* と同様に、この折丁も丸カッコで表示することになる。

Kk(Kk1.4, Kk2.3(-Kk3))

削除紙葉には \*K2 という折記号が印刷されているので、それを含めて表示すると、下記のようなになる。

Kk(Kk1.4, Kk2.3(-Kk3=\*K2))

第2項で K 折丁の差し替えについて述べた。そこでこの本での変更の様子を示すと下記の通りである。

A<sup>4</sup> B-2I<sup>8</sup> K<sup>8</sup>(-K2+\*K2) L-2I<sup>8</sup> 2K(Kk1.4, Kk2.3(-Kk3=\*K2))

最後の Kk 折丁が複雑に作られていたが、それは K2 の紙葉に対する差し替え紙葉(\*K2=Kk3)を作るためであったことが判る。

折り目が2つ出来る折丁については前述した通りである。この形の折丁は2種類あるので、1折丁に2つの束、2つの折り目がある場合、下記のように見分ける必要がある。

1. 両束の折記号が異なっていれば、どちらかの束は後から加えられた束なので、通常の規則で処理できる。
2. 両束の折記号が同じ場合はこれまでとは違った作りの折丁になる。

*A brief disquisition* の場合は図 23、*Political disquisitions* (第3巻) の場合は図 26 という具合に通常見かける折丁とは違った折丁が見つまっている。特に後者の場合、多く出回っている本の折丁だけを見ている限り、その折丁の本当の姿を解明することは出来ない。本稿で提示した1点(図 25)は折丁の姿を解明したばかりでなく、本作りの多様性をも示す内容を含んだ貴重な存在である。洋古書は同じ本でありながら、様々な姿をしている。これを欠点としてとらえるより、利点と理解し、本作りの様々な問題を解決する糸口として活用する必要がある。そのためには洋古書の存在を知らせる目録作成という地道な努力が不可欠である。

## 図版の所蔵一覧

- 図 1. *Leviathan* by T. Hobbes. 1651. 名古屋大学附属図書館 Mizuta-0012  
<https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/cont/01/G0000012sktn/001/004/001004471.pdf>  
109/209
- 図 2. *Leviathan* by T. Hobbes. 1651. 名古屋大学附属図書館 Mizuta-0012  
<https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/cont/01/G0000012sktn/001/004/001004471.pdf>  
121/209
- 図 3. *Leviathan* by T. Hobbes. 1651. 名古屋大学附属図書館 Mizuta-0012  
<https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/cont/01/G0000012sktn/001/004/001004471.pdf>  
9/209
- 図 4. *Leviathan* by T. Hobbes. 1651. 名古屋大学附属図書館 Hobbes I-156  
<https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/cont/01/G0000012sktn/001/004/001004468.pdf>  
9/211
- 図 5. *Political disquisitions* by J. Burgh. London, printed for Edward and Charles Dilly, 1775.  
名古屋大学附属図書館 Mizuta-0272
- 図 6. *Political disquisitions* by J. Burgh. London, printed for Edward and Charles Dilly, 1775.  
名古屋大学附属図書館 Mizuta-0269
- 図 7. *Political disquisitions* by J. Burgh. London, printed for Edward and Charles Dilly, 1775.  
名古屋大学附属図書館 Mizuta-0272
- 図 8. *Political disquisitions* by J. Burgh. London, printed for Edward and Charles Dilly, 1775.  
名古屋大学附属図書館 Mizuta-0269
- 図 9. *Emile* by J.J. Rousseau. 1762. Thomas Fisher Rare Book Library  
<https://archive.org/details/amileoudeldu01rous/page/n7/mode/2up>  
8/500 タイトルページ
- 図 10. *Emile* by J.J. Rousseau. 1762. Thomas Fisher Rare Book Library  
<https://archive.org/details/amileoudeldu03rous>  
11/400 タイトルページ
- 図 11. *A brief disquisition of the law of nature* by J. Tyrrell. London, printed and are sold by Richard Baldwin,  
1692.  
名古屋大学附属図書館 Mizuta-1785
- 図 12. *A brief disquisition of the law of nature* by J. Tyrrell. London, printed and are sold by Richard Baldwin,  
1692.  
名古屋大学附属図書館 Mizuta-1785
- 図 13. *Voyage de Siam des peres Jesuites, envoyes par le roy, aux indes a la Chine.* Paris, Ches Pierre Mortier,  
1688.
- 図 14. *De solis parallaxi* ad Cl. Grandjean de Fouchy. Romae, ex Typographia Hermathenaea, 1766.
- 図 15. *Saül et David : tragédie en cinq actes : d'après l'anglais, intitulé, The man after God's own heart.*  
Imprimé chez Robert Freeman, 1760.  
名古屋大学附属図書館 135||ZIYUSISO||135.3||An.
- 図 16. *Recueil des actions heroïques et civiques des Republicains francais.* No.3...par Leonard Bourdon. Paris,  
de l'Imprimerie nationale, L'an II.

- 図 17. *IIANΣEBELA or, A vie of all religions in the world.* London, 1672.  
名古屋大学附属図書館 Mizuta-1489
- 図 18. *Three severall treatises concerning the truce at this present propounded.* 1630.  
<https://archive.org/details/threeseveralltre00west/page/n5/mode/2up>  
6/44.

## 注

1. Gaskell, P. *A new introduction to bibliography.* Oxford, Clarendon Press, reprinted with corrections 1979. p. 116
2. 高野 彰「トマス・ワレン：『リヴァイアサン』（ヘッド版）の印刷者」『名古屋大学附属図書館研究年報』第 13 号（2019）p.7。データベース ESTC は 1651 年のヘッド版 Leviathan の書誌の注記を下記のように表示している。  
Printed by Thomas Warren (sig. A-2B<sup>4</sup>) and Richard Cotes (sig. 2C-3D<sup>4</sup>) according to Akira Takano (see: *Annals of Nagoya University Library studies*, v. 13, 2016, p. 1-17) . Previously, the printing through quire 2B was wrongly attributed to Roger Norton instead (see: *Thomas Hobbes: Leviathan*, ed. Noel Malcolm, vol. 1, p. 211-)
3. 前出。高野 彰「トマス・ワレン：『リヴァイアサン』（ヘッド版）の印刷者」pp.1-17.
4. 高野 彰「『エミール』初版（パリ版）のタイトルページの印刷」『名古屋大学附属図書館研究年報』第 16 号（2018）pp.1-9.
5. 高野 彰「折丁：その要件」『名古屋大学附属図書館研究年報』第 18 号（2020）pp.2-3.5.  
Bowers, F. *Principles of bibliographical description.* New York, Russell & Russell, reissued, 1962. p. 205.
6. *op. cit.* Bowers, F. *Principles of bibliographical description.* pp. 205-7.
7. *op. cit.* p. 226.
8. 前出。高野 彰「折丁：その要件」p.4.
9. 同上 pp.2-3 図版 23 (*A brief disquisition of the law of nature* by James Tyrrell (1692)) の所蔵館は名古屋大学附属図書館 (Mizuta-1785) である。
10. 同上 pp.5-6
11. 下記は折丁の記述について述べている重要な本や文章である。しかしこれまで「初めて」作られた折丁が「折り目を 2 つ」持っていることについて触れている文章はない。  
Bowers, F. *Principles of bibliographical description.* New York, Russell & RuReissued, 1962.  
McKerrow, R.B. *An introduction to bibliography for literary students.* Oxford, Clarendon Press, 1927. pp. 155-163.  
Gregg, W.W. 'Formulas of collation' *A bibliography of the English printed drama to the Restoration.* Vol. 4. Excursus IV, pp. cxlviii-clviii.  
Tanselle, G.T. 'Title-page transcription and signature collation reconsidered' *Studies in bibliography.* Vol.38. 1985. pp. 45-81.
12. *op. cit.* Bowers, F. pp. 197-8. James Burgh の *Political disquisitions* (1775) の所蔵館は名古屋大学附属図書館の Mizuta-0272。
13. 高野 彰「James Burgh の *Political disquisitions* (1775)」『名古屋大学附属図書館研究年報』第 17 号（2019）pp.1-6.

# 西洋古典籍目録作成の実際：名古屋大学の事例

## Cataloguing Western old and rare books: the case of Nagoya University Library

中井 えり子  
Eriko NAKAI

### はじめに

本稿は、科研費基盤 B「啓蒙の言説圏と浮動する知の境界」のプロジェクトとして、2022 年 1 月 22 日に、オンラインで開催されたミニ・シンポジウム「西洋古典籍を巡る書誌と資料研究法の現在—『水田文庫貴重書目録補遺；水田珠枝文庫貴重書所収』を中心に」で発表した内容に加筆・修正したものである。

ミニ・シンポジウムの主催が科研費によるものであるため、研究者にも、図書館業務を理解していただけるよう、国立大学に勤務した図書館員が、どのような職歴で、どのように西洋古典籍に関わったかをたどり、その中で扱った興味深い版本について述べる。

その後、名古屋大学の西洋古典籍の文庫・コレクションの特徴を確認し、西洋古典籍の目録作成のあり方を考える。

### I. 西洋古典籍に関わる経歴

一図書館員が西洋古典籍に関わった業務のうち、書誌関係の事項のみ取り出して、年代順に列挙する。

<>内は在職部署（すべて名古屋大学）で、名称は当時のもの。著作のうち、『名古屋大学附属図書館研究年報』および『名古屋大学附属図書館報 館燈』掲載の論文・記事は省略した。

西暦	事 項
1974	水田洋教授（日本学士院会員、名古屋大学名誉教授、アダム・スミス（Adam Smith, 1723-1796）の世界的研究者。以下水田教授）、および川原和子 <sup>1</sup> 氏（故人）との出会い<経済学部図書室 1974.7-1981.4 >
1989	第 9 回西洋社会科学古典資料講習会受講（一橋大学社会科学古典資料センター 10.4-7）<教養部・総合言語センター図書室 1988.4-1990.12 >
1990	「プランタンの活字について」執筆（『東海地区大学図書館協議会誌』35, 1990）<教養部・総合言語センター図書室 >

1993	第13回西洋社会科学古典資料講習会 講師 書誌学Ⅳ「16世紀の欧文活字：プランタンの活字を中心にして」(10.26) <法学部図書室 1991.1-1994.3 >
1994	「18世紀フランス自由思想家コレクション」(1987年大型コレクション)の目録登録 <学術情報課第二情報資料課掛 1994.4-1996.3 >
1999	展示会「百科全書とその時代展」(11.22-28) <情報サービス課 1997.4-2001.3 >
2001	「コールリッジが所蔵した『蜂の寓話』」執筆(ウチの図書館お宝紹介!『図書館雑誌』95(6), 2001.6) <情報サービス課(執筆時) >
2007	「永井文庫」 <sup>2</sup> の受入準備 <情報サービス課 2006.4-2008.3 >
2010	「水田文庫」 <sup>3</sup> 担当 <附属図書館研究開発室研究員 2010.4-2015.12 > 展示会「水田文庫新収蔵記念 アダム・スミスと啓蒙思想の系譜」(10.14-11.11)
2013	『水田文庫概要』 <sup>4</sup> 執筆
2014	<i>The Mizuta Library of rare books in the history of European social thought : a catalogue of the collection held at Nagoya University Library.</i> 『水田文庫貴重書目録』 <sup>5</sup> 編集
2015	筑波大学図書館職員のための講演会 講師 「西洋初期刊本整備の実際：保存と目録」(3.9) 「大学図書館と特殊コレクション —名古屋大学の西洋古典籍・特殊コレクション」『カレントアウェアネス』執筆 no. 323, 2015.3
2016	第36回西洋社会科学古典資料講習会 講師 書誌学Ⅱ「西洋古典籍と大学図書館」(11.17)
2017	平成28年度第2回東海地区大学図書館協議会研修会 講師「水田文庫整理にたずさわって」(2.6)(講演要旨は『東海地区大学図書館協議会誌』62, 2017掲載) 科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「データベース」協力 <経済学研究科研究員 2017.4-2018.5 >
2018	一橋大学社会科学古典資料センター創立40周年記念平成30年度文化的・学術的資料の保存国際シンポジウム「西洋貴重書を守る、活かす」に、水田教授と参加し、「水田文庫を特徴づける資料群」を報告(12.7)
2021	<i>The Mizuta Library of rare books in the history of European social thought : a supplementary catalogue of the Nagoya University Library collection, including the catalogue of Mizuta Tamae Library of rare books.</i> 『水田文庫貴重書目録補遺：水田珠枝文庫貴重書所収』 <sup>6</sup> 松波京子氏と共編 <経済学研究科研究員 2020.4-2021.3 >

事務系の職員は概ね3年前後で、他の部署へ異動して研鑽を積むが、名古屋大学のような総合大学の場合、附属図書館(中央図書館)や医学部分館の各掛(2018年度より、「係」を用いる)のほか、各部局にも図書室があり、業務内容も、扱う図書資料の性格も異なる。たまたま筆者の場合は、中央図書館の目録担当部署とサービス課のほかは、社会科学系の教育・研究にたずさわる部局に配属された。教養部・総合言語センター図書室(現在の情報・言語合同図書

室)は、医学以外のほぼ全教科を網羅していた。2001.4-2007.3、2008.4-2010.3の間は学外に転出しており、西洋古典籍関連の業務はしていない。

## II. 書誌に関わる体験の事例

名古屋大学在籍中に上記のような業務にたずさわって体験した西洋古典籍の書誌的に印象的な事柄を、以下に4つの業務に分けて紹介する。見出しとして<>内に、書名を入れた。また、以下で言及する著作のうち、『先の国民懺悔の日12月13日にプロテスタント非国教徒におこなった説教』、『法の精神』（初版初刷、および2刷）、『リヴァイアサン』初版（ヘッド版、ベア版、オーナメント版）、『桶物語』（初版）、『バジリアッド』（初版、および海賊版）、『エミール』（初版パリ版12折本、およびアムステルダム版）、『蜂の寓話』（3版）は、図書館ホームページの画像データベース「西洋古典籍デジタルライブラリー」で、図録や『名古屋大学附属図書館研究年報』の記事は、ホームページの「イベント（展示会・講演会）」やリポジトリから全文を見ることができる。なお、本文で掲載した画像は、すべて名古屋大学附属図書館所蔵本で、文庫名やコレクション名が記載されていないものは、文庫外の一般貴重書である。

### (1) 西洋古典籍展示会の図録作成

#### <百科全書>

1999年11月に名古屋大学附属図書館で「百科全書とその時代展」と題する、初めての西洋古典籍の展示会が開催され、チラシ、ポストカードや図録の作成の事務を担当した。附属図書館が2セット所蔵する *Encyclopédie, ou, Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société [sic] de gens de lettres ...* 『百科全書』は、展示会の目玉であったが、いずれも1770～1780年にジュネーブで出版された、いわゆるジュネーブ版であることに気がつかず、パリで出版されたオリジナルのパリ版として、図録等を作成してしまったという苦い経験がある。標題紙のタイトルにある *société* の一つ目の *e* のアクセントがなく、*société* となっており、標題紙を見ただけで初版のパリ版でないことがわからなければいけなかった。図録を国立大学の図書館を中心に配布してしまってから、一橋大学社会科学古典資料センターの方からご指摘を受けた。これが書誌の大切さを身をもって体験した始まりである。その後この2つのセットの内容が福田名津子氏によって調査され、2006年に『名古屋大学附属図書館研究年報』に発表された<sup>7</sup>。

#### <オシアナとその他の作品集>

筆者にとって西洋古典籍の2回目の展示会が、2010年10月の「水田文庫新収蔵記念 アダム・スミスと啓蒙思想の系譜」である。当時90歳の水田教授はお元気でたびたびご来館され、ご指導いただいた。しかし、展示品の一つであるジェームズ・ハリントン (James Harrington,



1611-1677) の主著 *The Oceana and other works of James Harrington : with an account of his life by John Toland.* (London, 1771) 『オシアナとその他の作品集』(図1) が、トマス・ホルス (Thomas Hollis, 1720-1774) の出版であることが調べきれず、学外の研究者からご指摘をいただいた。そのことは ESTC にも注記されていない。水田教授は、当然ホルスのことはご存じて、ご自

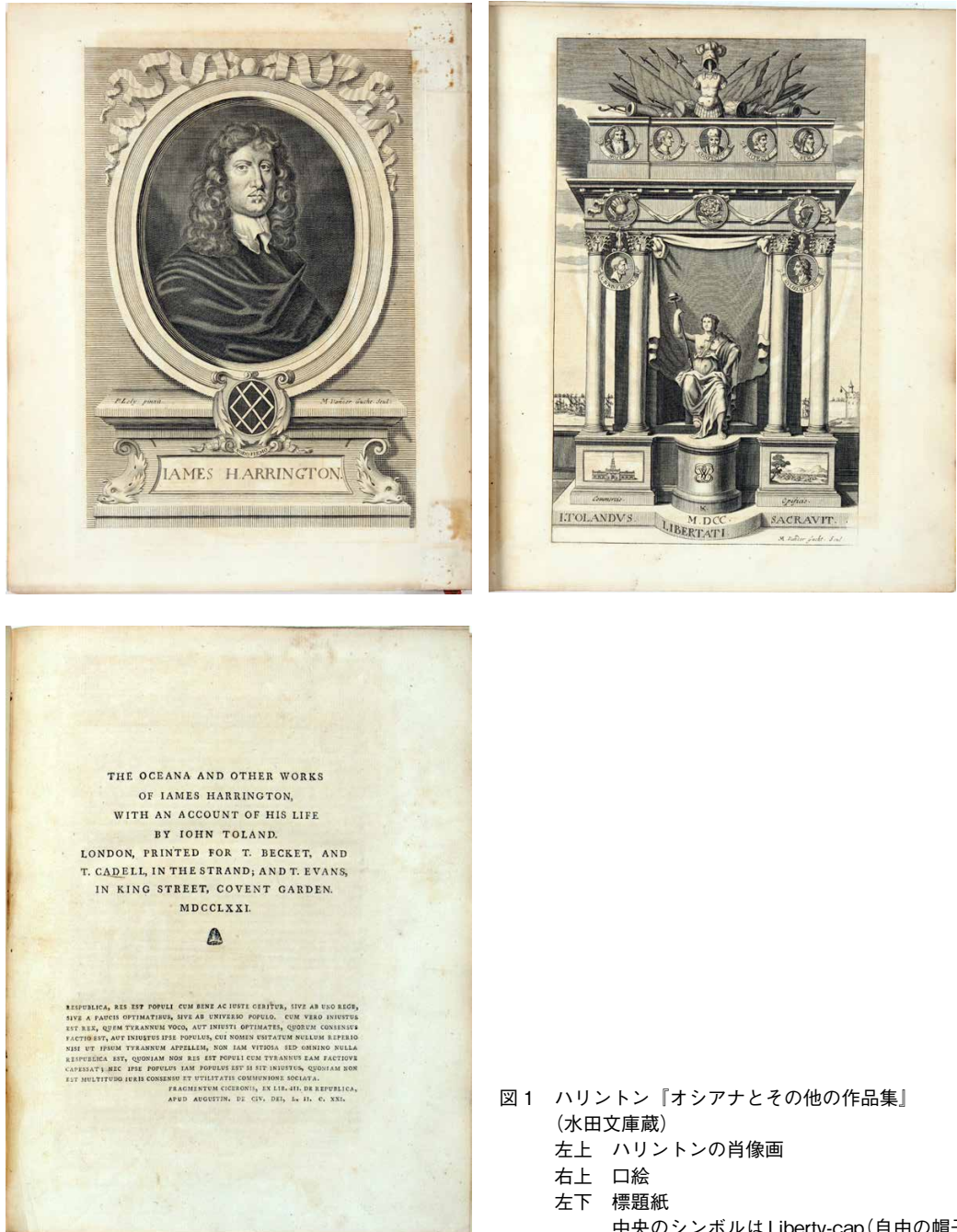


図1 ハリントン『オシアナとその他の作品集』  
 (水田文庫蔵)  
 左上 ハリントンの肖像画  
 右上 口絵  
 左下 標題紙  
 中央のシンボルは Liberty-cap (自由の帽子)

身もホリスについて執筆されており<sup>8</sup>、水田文庫には立派な装幀のホリスの伝記 *Memoirs of Thomas Hollis, ESQ. F.R. and A.S.S.* v. 1, v. 2. (London, 1780) も収蔵している。さらにホリス関係の文献も所蔵されていて、図書館に寄贈してくださったが、『オシアナとその他の作品集』がその1冊であることは失念されていたようだ。標題紙真ん中のシンボルは、Liberty-cap (自由の帽子) と言われ、ホリスが使っていた活字の1つ<sup>9</sup>で、このことからホリスが関与していたことがわかる。標題紙のページは、図録には掲載したものの、展示会では開いて展示してなかった。

#### <アメリカ独立戦争について、ヨークの非国教徒集会でおこなった反戦平和の説教>

図録の解説を何項目か担当して、収穫もあった。一介の図書館員が知るよしもないニューカム・キャップ (Newcome Cappe, 1733-1800) および、その著作 *A sermon preached on the eighth of February, 1782, a day of national humiliation ...* (York, 1795) 『アメリカ独立戦争について、ヨークの非国教徒集会でおこなった反戦平和の説教』の解説を担当することになった。困り果てて、藁をもすがる思いで、OPACでキャップの他の著作を探したところ、似たタイトルの「国民懺悔の日」に行われた説教 *A sermon preached on the thirteenth of December, the late day of national*

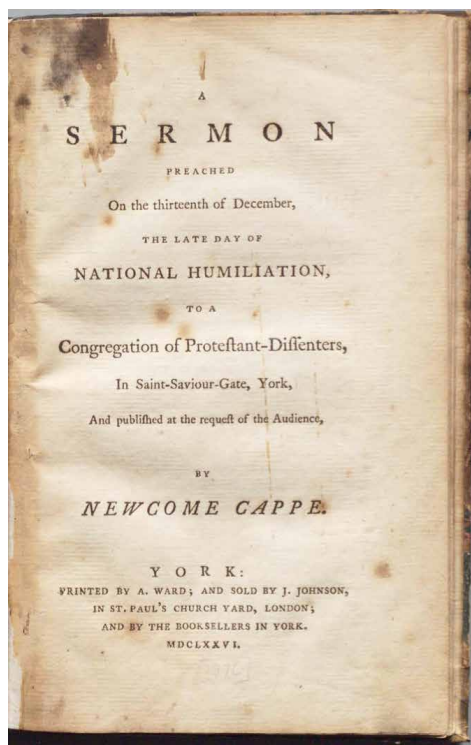
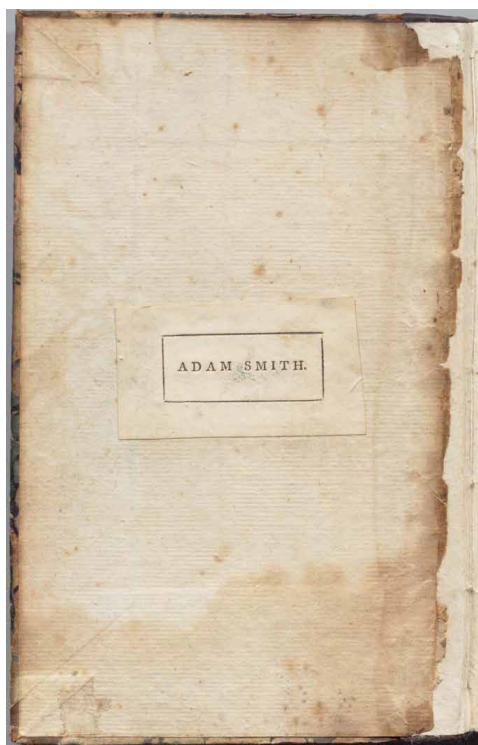


図2 ニューカム・キャップ『先の国民懺悔の日12月13日にプロテスタント非国教徒におこなった説教』アダム・スミス旧蔵本(永井文庫蔵)

左 アダム・スミスの蔵書票(見返し)

右 標題紙

*humiliation, to a congregation of Protestant-dissenters, in Saint-Saviour-Gate, York, and published at the request of the audience.* (York, 1776) 『先の国民懺悔の日 12 月 13 日にプロテスタント非国教徒の集会におこない、聴衆の求めで出版された説教』が見つかった。永井文庫収蔵本で、なんと注記に“Bookplate on front pastedown: Adam Smith.”と記述されていた。水田教授に本書を確認していただいたところ、それまで所在不明で水田教授がお探しだったアダム・スミスの旧蔵書であることがわかった<sup>10</sup>。水田教授の代表的著作 *Adam Smith's library : a catalogue.* (Oxford: Clarendon Press; New York: Oxford University Press, 2000) 『アダム・スミスの蔵書』の 308、キャップの「説教」の項目では‘Unlocated’と記載されており、水田教授が買い損ねた古書店のカタログの情報が掲載されている。永井教授は、非国教徒の著作を集めておられ、スミスの旧蔵書であることには全く気づかれなかったとのことであった。名古屋大学唯一のスミス旧蔵本である (図 2)。

また、展示会の際には、重複本を所蔵していることで、『百科全書』、ホップズの『リヴァイアサン』初版や、アダム・スミスの『道徳感情論』初版など、複数頁を展示することができた。たまたまみつけた重複本の興味深い書誌については、後述の (3) 『水田文庫概要』『水田文庫貴重書目録』等の執筆・編集から、で扱う。

## (2) 西洋古典籍の選書

初版として購入されていたモンテスキュー (Charles de Secondat, baron de Montesquieu, 1689-1755) の *De l'esprit des loix ...* (A Geneve, [1748] or [1749]) 『法の精神』が、目録登録の段階で真正初版ではないことがわかった。筆者が研究開発室に着任した頃は、西洋古典籍を購入する余裕があったようで、附属図書館で、2012 年度に初版の初刷 [1st ed., 1st impression] (A Geneve, [1748]) を購入することができた。価格は、ほぼ倍になった。最初購入した『法の精神』は、初版の 2 刷で、そのことは、標題紙の出版者の綴りが、初刷は Barrillot であるのに対し、Barillot と印刷され、r が一つ抜けているなど、標題紙の記述が異なるが、古書店からの情報は初版としか書かれていなかった。ただ、名大本の 2 刷本は、法学者でフランス民法典の起草者の一人であるポルタリス (Jean-Etienne-Marie Portalis, 1746-1807) の蔵書票が貼られ、初刷より装幀もよい。名古屋大学蔵書検索 OPAC の注記を参照のこと。

その後も、研究開発室経費や特別図書費などで、水田文庫等既存の文庫・コレクションを補完するものとして、およそ 10 年間で水田教授のご意見も伺いながら、古書店のカタログをもとに選書し、1800 年以前刊行の書物を 90 点以上購入することができた。また、この間、冒頭で紹介した川原和子氏の追悼集『女性司書の足あと』(注 1 参照) の出版経費の残金や売り上げ金で、水田教授とご相談のうえ、貴重書 4 冊 (うち 2 冊は 1800 年以前刊本) を購入して寄贈したこともあった。

<桶物語>

アイルランド出身の風刺作家、聖職者であったジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) は、『ガリバー旅行記』(初版は1726年刊)で有名であるが、水田文庫に、アイルランドを擁護して、イングランド政府を攻撃する *The Hibernian patriot ...* (London, 1730) 『ドレイピア書簡集』(ダブリンで1725年に出た書簡集をロンドンで1730年にリプリントしたもの)があるため、水田文庫を補完するものとして、風刺小説 *A tale of a tub*. (London, 1704) 『桶物語』(初版) (図3-1)を選定した。

『桶物語』の初版には、p. 320の9-10行目、*furor*の後が“uterinus”と印刷されている刷と空白になっているものがあるという情報を、古書店から得ていた。オファーがあったのは、後者の刷であったため、値引き交渉をしたが、あくまでも初版と言われ、交渉には失敗した。『桶物語』の場合は、ESTC T49832でも、この両者は異刷 (variant) であるというだけで、別書誌になっていないことや、古書店からの情報でも、ヴィクター・ロスチャイルド (第3代ロスチャイルド男爵) (Nathaniel Mayer Victor Rothschild, 3rd Baron Rothchild, 1910-1990) が、“uterinus”が印刷されている方が早い刷“an earlier state”だと言っている<sup>11</sup>とだけあって、断定的ではないことが理由と考えられる。“uterinus”とは、岩波文庫の訳者深町弘三は、「『色情狂』くらいに考えてよいだろう。」と書いている<sup>12</sup>。

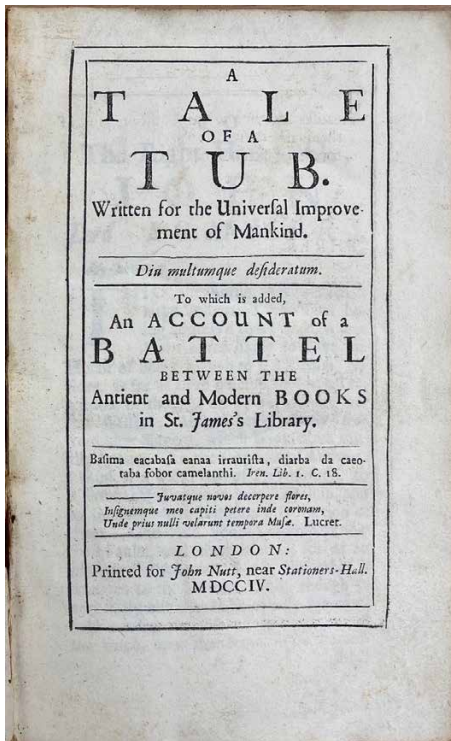


図3-1 スウィフト『桶物語』の標題紙

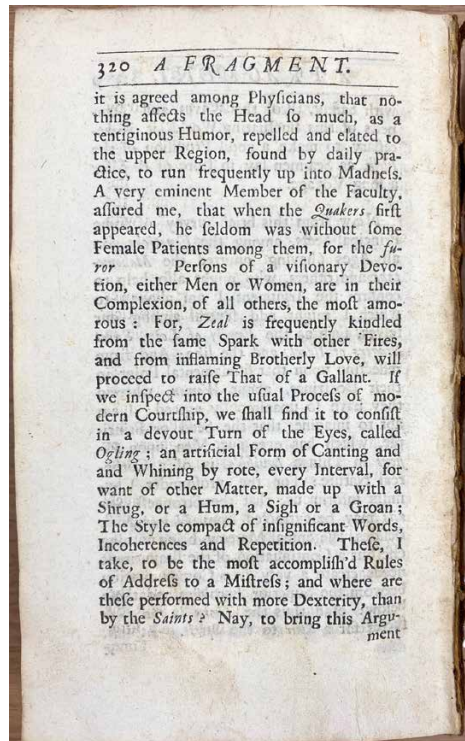


図3-2 スウィフト『桶物語』p. 320 (『人工神憑の説』)



『桶物語』の画像を公開している機関では、“uterinus”と印刷されている版本はみつけれなかった。ESTC T49832 にリンクされている Google Books の Oxford 大学本や、オーストリア国立図書館本の p. 320 の該当箇所は、名大本と同じで空白である。なお、ECCO の画像（ケンブリッジ大学蔵）も空白である。Harvard 大学本の OPAC HOLLIS number 990122799690203941 は、注記には“P. 320, lines 9-10: “for the furor uterinus. Persons””とあるが、画像は公開されていない。

なお、『桶物語』は、原書の初版から、『桶物語』『書物戦争』『人工神憑の説』（日本語書名は、前出の岩波文庫本による）の3編を1冊にして出版されている。それぞれ別個の標題紙がついているが、後の2点は、いずれも出版者の印刷はなく、“London: Printed in the Year, MDCCIV”と印刷されている。3編の頁付けや折記号は続いており、印刷の違いがある p. 320 は『人工神憑の説』（図3-2）にある。

### <バジリアッド>

18世紀フランスのユートピア思想家のモレリ（Étienne-Gabriel Morelly, 1717-1778）が匿名で出版した *Naufage des isles flottantes, ou Basiliade du célèbre Pilpai, Poëme héroïque*. t. 1, t. 2. (A Messine [i.e. Paris], 1753) 『バジリアッドまたは浮き島の難破』は、中央図書館で所蔵していたが、たまたま古書店のカatalogをチェックしていたところ、First edition とある『バジリアッド』が掲載されていた。ところが、その口絵や標題紙が名大所蔵本と異なっていたため、現物を比較調査して、初版ではないとして値引き交渉をして購入した。第1巻を比べたところ、口絵と標題紙の vignette（飾り絵、カット）が、似ているが異なるもので、しかも顔の向いている方向が異なる（図4-1、4-2）。Errataがある版と、Errataがなく、すでに修正されている版とでは、通常前者をより古い版と考える。すでに所蔵していた版は、8折本で、Errataがあり、後から購入した版は12折本でErrataがなく、すでに修正済みであった。確たる典拠資料はみつけれず、諸説あるようであるが、フランス国立図書館の目録（FRBNF46827119）や、いくつかのモレリを解説する文献で、鈴木峯子訳『バジリアッドまたは浮き島の難破』（岩波書店、1997）の「解説」<sup>13</sup>など、口絵の顔が標題紙と反対の方向を向き、タイトル頁の女性の顔が口絵と反対方向を向いているものが掲載されており、断定はできないものの、8折本を初版と考えて、12折本を海賊版とし、これ以上深入りをしないこととする。なお、第2巻の標題紙の vignette も似ているが、口絵と同様に向きが逆である。



図4-1 モレリ『バジリアッド』初版 第1巻

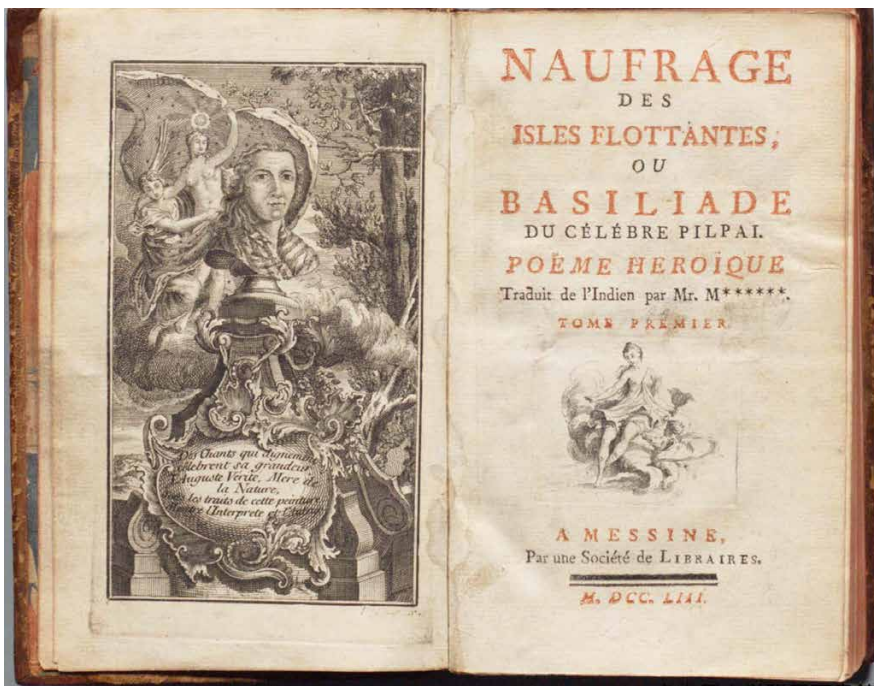


図4-2 『バジリアッド』海賊版 第1巻

## <エミール>

ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) の *Émile, ou De l'éducation*. 『エミール』 (1762) には、3つの初版 (パリ版8折本、パリ版12折本、アムステルダム版) があるが、図らずも名古屋大学では3つとも揃えることができた。これらの初版については、マッキーカン (J. E. McEachern) による英文の研究書<sup>14</sup>のほか、坂倉裕治氏らや高野彰氏が『名古屋大学附属図書館研究年報』で、松波京子氏が『書物の記述・世界の記述：書誌が描く18世紀啓蒙の世界』で論じているので、これらを参照されたい<sup>15</sup>。この中の高野氏の論文により、本学所蔵本の出版地が“A la Haye”と印刷されたパリ版8折本の『エミール』(2021年2月受入)は、標題紙に印刷された三筋笱から、より早い刷であることがわかる。

話が前後するが、アムステルダム版とよばれ、出版地が“Selon la copie de Paris”(黙許を受けたパリ版にもとづく)と印刷された版本は、古書店のカタログには、「海賊版」と記載されており、水田教授と『エミール』の海賊版とはおもしろそうだということで、『エミール』の初版について全く知識のなかった2014年に特別図書経費を申請し、たまたま安価に購入したものである。翌2015年3月には、友の会の第35回「ふみよむゆふべ」で、山内芳文氏(筑波大学名誉教授)が「『エミール』の世界 ～その出版と教育への期待～」の演題で講演され、そのときに初版の1つであるというご指摘をいただいた。

### (3) 『水田文庫概要』『水田文庫貴重書目録』等の執筆・編集から

展示会の図録作成のみならず、文庫やコレクションの概要や目録作成のために書誌調査が必要で、その作業中に、重複本を見つけることができた。その後もOPACを使って、中央図書館内に限って調査してみると、1800年以前刊行本の約3,080点のうち、約190点の重複本と思われる版本があった(約6%に相当)。すべてを調査確認したわけではないが、20点に1点以上が重複していることになる。

重複本同士を見比べると、装幀や旧所蔵者の蔵書票や署名以外は、全く同一という版本も少なくないが、異刷とも言えないくらいの印刷の違いを含め、差し替え紙葉の有無など、興味深い相違がいくつかみつかった。高野彰氏による調査結果については、『名古屋大学附属図書館研究年報』掲載論文<sup>16</sup>を参照されたい。

筆者が調査した重複本のうち、ウィルバーフォース (William Wilberforce, 1759-1833) の *A practical view of the prevailing religious system of professed Christians, in the higher and middle classes in this country, contrasted with real Christianity*. 初版 (London, 1797) 『真のキリスト教徒との対比における本邦の上中流階級の自称キリスト教徒の支配的宗教体系に関する実践的考察』については、松波京子氏との共同執筆である「『水田文庫貴重書目録補遺：水田珠枝文庫貴重書目録所収』編集後記」『名古屋大学附属図書館研究年報』19 (2021) をご覧いただきたい。

## <哲学辞典>

ここでは、匿名で出版されたヴォルテール (Voltaire, 1694-1778) の *The philosophical dictionary for the pocket*. 英語版初版 (London: Printed for S. Bladon ..., 1765)、および (London: Printed for Thomas Brown, 1765) 『哲学辞典』(フランス語の原書 *Dictionnaire philosophique* は 1764 年刊) (図 5-1、5-2) を紹介したい。『水田文庫貴重書目録』編集後記(『名古屋大学附属図書館研究年報』13, 2015. pp. 59-60) でも言及したが、その後の調査結果も含めて再度取り上げる。これらの英訳本『哲学辞典』は水田文庫と、ホップズ・コレクション II に収蔵されている。この項では、以降、それぞれ水田本、ホップズ本という。

水田本は、Printed for S. Bladon (ESTC N20652、以下、Bladon 版)、ホップズ本は、Printed for Thomas Brown (ESTC T133745、以下、Brown 版) と、刊記が異なるため、重複本とは言えないが、頁数 ([4], 335, [1] p.) や判型が 8 折と同じであるだけでなく、頁付けのミス (p. 218, 241-256 が、18, 225-240 と印刷) や印刷機 (者) 番号が一致し、「異刷」とされる事例の一つと考えられる<sup>17</sup>。すなわち、本文部分とは別に標題紙の紙葉を 2 種類作成して綴じ、使用しない方をカットしたものがそれぞれ製本されたと推定できる。従って、標題紙の差し替えに気づかなければ、折記号は、[A]<sup>2</sup> B-Y<sup>8</sup> である (B 折丁の前の紙葉には折記号が印刷されていないため、[A] とする) が、紙葉のカットを折記号に反映させるとその違いが明確になる。B

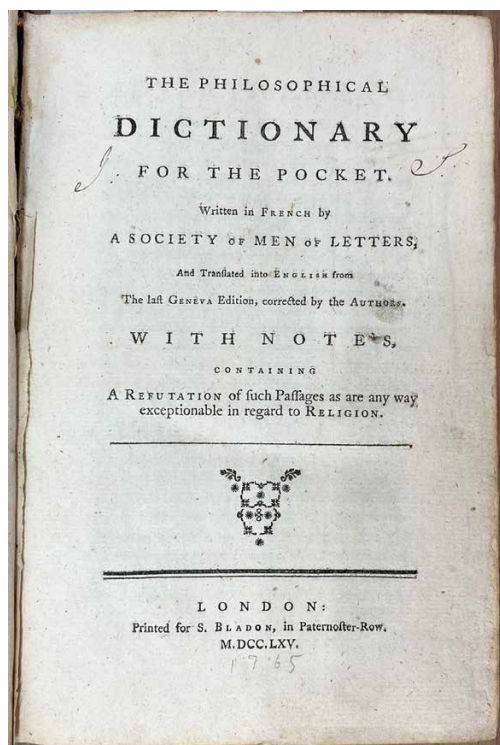


図 5-1 ヴォルテール『哲学辞典』  
Bladon 版 (水田本)

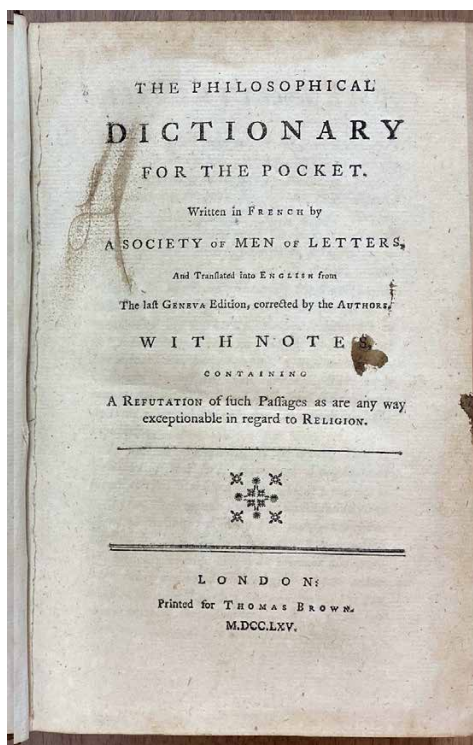


図 5-2 ヴォルテール『哲学辞典』  
Brown 版 (ホップズ本)



紙葉の前までの構成は、遊び紙1葉の次に、標題紙（裏面は白紙）と‘Advertisement.’（両面印刷）である。カットして残った紙の切れ端（stub、以下スタブ）のある場所を確認する。

Bladon 版（水田本） 標題紙の前、最後の紙葉（Y8）の後

Brown 版（ホップズ本） 標題紙の前、最後の紙葉（Y8）の後

綴じ糸や紙葉のつながりについては、のどがきつく、次のことが確認できただけである。

Bladon 版は、標題紙と Advertisement の間に綴じ糸があり、標題紙とその前のスタブはつながっていない。

Brown 版は、標題紙と Advertisement の間の綴じ糸の有無が確認できず（おそらく存在しない？）、標題紙はその前にあるスタブに貼り付けられているように見える。このスタブは、Bladon 版の標題紙が印刷されていた紙葉の切れ端と考えられる。Y8<sup>v</sup>は白紙であるが、Brown 版の標題紙が色移りしているため、Y8 の後ろのスタブは、Brown 版の標題紙が印刷されていた紙葉で、標題紙を切り落とした切れ端と推測できる。

上記の事情から A 折丁の綴じの処理の仕方が、それぞれ異なるのではないかと考える。その理由として、他にも Google Books による BL 所蔵 Brown 版の画像<sup>18</sup>（2014 年デジタル化。カラー版で、のどのところまで撮影されている）から推測した。BL の Brown 版のスタブは、標題紙と Advertisement の間と、Advertisement の後にある。最初のスタブは、削除された Bladon 版の標題紙で、2 つ目のスタブは、白紙葉となる（図 6）。

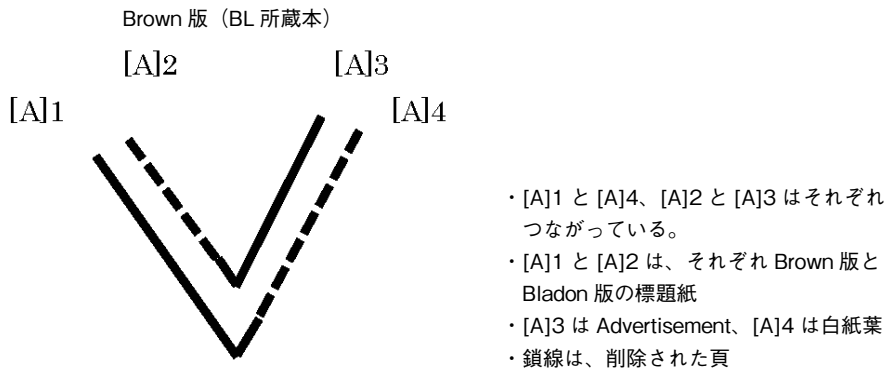


図 6 Brown 版（BL 所蔵本）の Google Books の画像より推定した [A] 折丁

この場合の Brown 版の折記号は、 $[A]^4(-A2,4)B-Y^8$  となり、同じタイプの [A] 折丁の Bladon 版があるとすれば、 $[A]^4(-A1.4)B-Y^8$  となると考えられる。

ネット上で公開されている画像（有料を含む）を確認すると、Bladon 版は ECCO の Bodleian Library のみで、Brown 版は、ECCO の British Library を含めて、Univ. of Michigan (Hathitrust Digital Library、以下 Hathi と略す)、Univ. of Oxford, Taylor Institution Library (Google Books、以下 Google と略す)、British Library (Google)、McGill University Library (Internet Archive) の計 5 点がある。ちなみに、Bladon 版の ESTC の書誌レコード N20652 にリンクされている Hathi

と Google の画像は、Brown 版の画像で、それぞれ Michigan 大学本と Oxford 大学本である。

これらから得られた画像では、Bladon 版の印刷機（者）番号は、29 箇所あり、Bodleian Library (ECCO) 本と水田本は全く同じであった。頁付けのミスで p. 218, 241-256 が、それぞれ、18, 225-240 となっている点も同じである。しかし、Bodleian Library 本は、178-179 頁が重複して存在している。

一方、Brown 版の印刷機（者）番号は、やはり 29 箇所あるが、上記の 5 点のうち、Michigan 大学本のみ、p. 286 の印刷機（者）番号が「a」であり、その他の 4 点は、Bladon 版と同じ「3」である。p. 286 以外の印刷機（者）番号は、Bladon 版も Brown 版もすべて同じである。

また、5 点すべてが、pp. 241-256 がそれぞれ 225-240 と間違っていて印刷されていることは、Bladon 版と同じであるが、p. 218 については、BL 本 2 点（Google、ECCO）と Oxford 大学が「218」と正しく印刷されており、Michigan 大学本および McGill 大学本は、ホップズ本と同じく、「18」と間違っている。ちなみに p. 218 の印刷機（者）番号は、Bladon 版ともすべて「3」である。

重複頁については、BL 本（ECCO）のみ、pp. 88-89 と pp. 208-209 が、それぞれ重複して存在している。

これだけの調査で、名古屋大学が所蔵している 2 つの刷以外に、わずかに印刷の異なる刷が何種類か存在することがわかった。名大本の標題紙の処理の仕方がよくわからず、本稿では推測しかできないため、また名大本以外に印刷の少しずつ異なる刷が何種類もあり、印刷機（者）番号についても、さらなる調査が必要なため、これ以上の調査は別稿にゆずる。

#### (4) 西洋古典籍の画像データベース化

科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「データベース」の事業として<sup>19</sup>、中央図書館所蔵の貴重書の中から、画像データベース化することになった。附属図書館ホームページのパナーは「西洋古典籍デジタルライブラリー」。このプロジェクトでは、主として、画像化対象資料の選定と書誌データの見直しのお手伝いをさせていただいた。

##### <蜂の寓話>

画像化の選定にあたっては、世界にひとつしかないもの、画像化されていないもの、刊行年代の古い版本から選定した。手稿本は世界にひとつしかないものであるが、刊本でありながら著名人の書き込みのある版本があり、それを画像化することにした。バーナード・マンデヴィル（Bernard Mandeville, 1670-1733）の *The fable of the bees : or, Private vices, publick benefits. The third edition.* (London, 1724) 『蜂の寓話』第 3 版である（初版は 1714 年、2 版は 1723 年刊）（図 7）。本書は、ロマン派の詩人で哲学者のサミュエル・テーラー・コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）の所蔵だった本で、遊び紙にコールリッジ自筆の書き込みがある。

このコールリッジ旧蔵本は、一時行方不明になっており、その経緯も興味深い。コールリッジの没後 100 年の 1934 以降、1972 年の生誕 200 年祭のときも行方不明のままであった。その

P. 35. It is, indeed, a piece of simplicity & best of Mandeville's work, as the Man or exqu岸to *the books of Liberty & Property*. But as there have been, and are, *Prophets* and a man-shaped *North's* too, very plausible *Antitheses*, who have adopted his positions in *denial* of *John Locke*, it may be worth while to ask *how* by *what* strange change there happened to *what* among this *promiscuous* species of *Orator* *Antagonists*, *ye* *yet* many *these* *wise* *Men* (p. 28) *these* *Lawgivers*, *do* *so* *cleverly* *take* *advantage* of this *Peacock* *Talk* of *Pride* and *Vanity*.

THE  
F A B L E  
OF THE  
B E E S:  
OR,  
*Private Vices, Publick Benefits.*  
With an ESSAY on  
CHARITY and CHARITY-SCHOOLS.  
AND  
*A Search into the Nature of Society.*  
The THIRD EDITION.  
To which is added  
A VINDICATION of the BOOK  
from the Aspersions contain'd in a Presentment  
of the Grand-Jury of *Middlesex*, and  
an abusive Letter to Lord C.  
L O N D O N:  
Printed for J. T O N S O N, at *Shakespear's-Head*,  
over-against *Katharine-Street* in the *Strand*.  
M D C C XXIV.

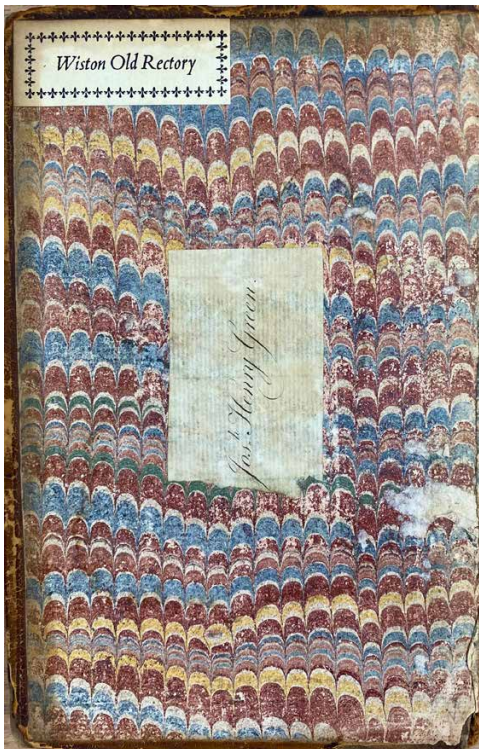


図7 マンデヴィル『蜂の寓話』  
第3版 (ホップズ・コレクション蔵)  
上 (左) 遊び紙に書かれたコールリッジ自筆の書き込み  
上 (右) 標題紙  
下 見返し  
グリーン蔵書票 (中央)  
ストーン蔵書票 (左上)

1972年12月1日に加藤龍太郎元附属図書館長が『中日新聞』（夕刊）に中央図書館に『蜂の寓話』第3版が入ったという記事を書いており、そのなかで、行方不明であったことも書かれている。生誕200年祭について、「イギリスでも大英博物館は7月21日から10月29日まで「コウルリジ展」を開き…」としている<sup>20</sup>ので、このときには、まだ行方不明であったと考えられる。しかし、加藤元館長の記事によれば、この生誕200年祭後の1か月そこそこの12月頃には名古屋大学に『蜂の寓話』が既に存在したことになる。現在は、ホップズ・コレクションIIIに収蔵されている。

『蜂の寓話』について、水田教授も、翌1973年に名古屋大学附属図書館報『館燈』の文献紹介のコーナーで解説された<sup>21</sup>。この記事は筆者が名古屋大学附属図書館に非常勤職員として採用された年度のこと、以来ずっと記憶に残っていた。それから、16～7年後、たまたま『図書館雑誌』の新企画「ウチの図書館 お宝紹介！」に、原稿依頼があったため、第2回目に、これらの記事をまとめ、1985年にロンドンとプリンストンで同時出版されたコーバーン(Kathleen Coburn, 1905-1991) 総編集 *The collected works of Samuel Taylor Coleridge. 12. Marginalia. v.*<sup>322</sup> に掲載された事実を追記して、「コウルリッジが所蔵した『蜂の寓話』」と題して寄稿した<sup>23</sup>。

あらためて、ここでもう少し詳しく紹介する。コウルリッジの死後、彼の蔵書はイギリスの医師で遺言執行人のグリーン(Joseph Henry Green, 1791-1868)<sup>24</sup>の所蔵となる。しかし、グリーン死後、1880年に『蜂の寓話』は競売にかけられ<sup>25</sup>、シェイクスピア研究者のボズウェル・ストーン(Walter George Boswell-Stone, 1848-1904)のものになる。

20世紀に入って、『コウルリッジ書誌』*A bibliography of Samuel Taylor Coleridge. (Philadelphia, 1903)*<sup>26</sup>を編集していたヘイニー(John Louis Haney, 1877-1960)は、この『蜂の寓話』をボズウェル・ストーンが所蔵していることを*Notes and queries*<sup>27</sup>で知り、『コウルリッジ書誌』に掲載すべく、1902年10月2日付けで彼にペン書きの葉書を出しているが、その中で‘John Wilson’s catalogue of old books.’(London, 1880)のアイテム番号no. 193で見たと書かれている。その後の詳細な経緯は不明であるが、『コウルリッジ書誌』のno. 199(p. 121)に、コウルリッジの注のある『蜂の寓話』が収録されており、ボズウェル・ストーン蔵書であることと、ウィルソンのカタログにコウルリッジの長い注が遊び紙に書かれていることが記されている。このウィルソンのカタログ自体も、『コウルリッジ書誌』の*Marginalia. D.*(p. 100)に掲載されており、次のような書誌がついている。

Wilson, John. *Old books, interesting, useful, and curious, including a few with manuscript notes by S.T. Coleridge.* 8vo., pp. 32. [London, 1880]

さらに注記として、‘A bookseller’s catalogue including four Coleridge marginalia cited below as nos. 5, 137, 150, and 199.’という記述があるので、このカタログの書誌であることは間違いないが、所蔵機関も不明で未見である。『コウルリッジ書誌』のno. 199に、『蜂の寓話』第3版が2巻本と書いてあるが、1巻本なので<sup>28</sup>、ヘイニーは、情報は得たものの、現物は見ているのではないかと思われる。

その20年近く後、ケイ (Frederick B. Kaye, 1892-1930. Northwestern University 教授) が、校訂版『蜂の寓話』全2巻 *The fable of the bees, or, Private vices, publick benefits.* v. 1, v. 2 (Oxford, 1924) を編集していた。その必要から、出版元のクラレンドン・プレスのニュー氏 (R.H. New) を通じて、ボズウェル・ストーンの手紙で、当時ストーン家の当主であったクリストファ・ストーン (Christopher Stone, 1882-1965) に、1922年6月15日付けの手紙で、『蜂の寓話』のコールリッジの注の写真か写しを依頼した。その結果は、校訂版『蜂の寓話』の第2巻 p. 453 に、陸軍少佐クリストファ・ストーンの所蔵であることやグリーン蔵書票がついていることも記載され、コールリッジの書き込みも翻刻して掲載している。本書には、もう1枚の蔵書票が貼られていることは記述されていないが、図7にあるように Wiston Old Rectory と印刷された小さいラベルが貼られている。こちらは、ストーン家のもの、あるいはクリストファ・ストーンのものだと推測される<sup>29</sup>。クリストファ・ストーンは、イギリス最初のディスクジョッキーで、1927年に初めてラジオでレコードを流した人物でもある。

少なくとも1922年6月にはクリストファ・ストーン蔵の『蜂の寓話』は、コールリッジの没後100年の1934年には、行方不明になっていたことになる。

前述の水田教授の『館燈』の記事によれば、1972年の秋にスコットランドの古書店 ([デュヴァル]) からオファーがあったということなので、生誕200年祭あたりの10月頃にはすでに古書店に出回っていたと考えられる。

コールリッジの書き込みのある『蜂の寓話』は、前述のヘイニーからボズウェル・ストーン宛の葉書と、クラレンドン・プレスのニューから、クリストファ・ストーン宛の書簡および、ボズウェル・ストーン蔵の『蜂の寓話』についての記事 (*Notes and queries*) のコピーとともに名古屋大学に受け入れられたので、ストーン家から、1922年6月以降1972年秋ころまでに古書店に流れたものと推測できる。その50年間の『蜂の寓話』の在処や、古書店デュヴァルがどういう経路で入手したかは、わからないままである。

『蜂の寓話』の画像データベース化を機会に、OPACの注記のうち2か所が次のよう修正された。

注記 References: Collected works of Samuel Taylor Coleridge, v. 12. Marginalia, 3. pp. 811-812

注記 Library's copy appended a postcard with note of inquiry from J.L. Haney to W.G. Boswell-Stone dated 2 Oct 1902, a letter from R.H. New to Christopher Stone dated 15 June 1922, and a note includes W.G. Boswell-Stone referring to this book (photocopy of Notes and Queries, Sept. 20, 1902. p. 231)

### III. コレクションと書誌

1800年以前刊行のオリジナルを収蔵する中央図書館の西洋古典籍の文庫やコレクションには、「永井文庫」「水田文庫」のほか、「ホップズ・コレクション I、II、III」(1979-80)、「フーバッチュ教授旧蔵書」(1985)「H.P. イブセン博士旧蔵書」(1987)、「英国貴族院日誌」(1987)、「18

世紀フランス自由思想家コレクション」(1987)、「ヨーロッパ教育史・教育理論研究コレクション」(1987)、「言語哲学コレクション」(1989)、「プロイセンの政治、経済、文化」(1991)「英国貴族院上訴事件判例集」(1993)があり(以上括弧内は受入年度)、その特徴は、名称から推測できるように、社会科学系の文庫・コレクションが大半であると言えよう。

これらの文庫・コレクションのうち、1800年以前の刊本の冊数は、「水田文庫」と、水田教授が受入に関与された<sup>30</sup>「ホップズ・コレクション」「18世紀フランス自由思想家コレクション」で78%以上を占める。その水田教授の資料収集の考え方や書誌の必要性を紹介しておく。以下の3点は、関係文献の抜き書きである。

- (1) アダム・スミスが晩年に関税委員をしており、自筆署名した税関の書類を集めた *Board's orders 1788-1789*. ([Edinburgh], 1788-1789) (経済学図書室所蔵) を購入したとき。「・・・図書館のいいところは、役に立つかどうかわからないようなものを集めるといことなのです。始めから価値がわかっているものは少しもおもしろくない。だいたい学問というのは、わからない領域へ行くから冒険的でおもしろいのであって、何の役にも立たない研究をしると賞金を出した人さえるくらいなんです。」(「アダム・スミスの蔵書をめぐって」『東海地区大学図書館協議会誌』35, 1990. p. 2)
- (2) ホップズ・コレクションIIを、Iと比べて、ホップズ自身の著作が少なく、ホップズをめぐる論争書が多く、それ自体は二流三流の著作であるとして。「集書のたのしみは、だれでもしっている一流品を手に入れることよりも、研究者のうちのみせどころになる二流三流品を、あつめることにあるのかもしれない。」(「ホップズ・コレクションの購入」『思想史の森の小径で』秋山書房, 1985. p. 80)
- (3) 社会思想史の研究にどうい書誌が必要かを述べたとき。「社会思想史の原資料、原本といえば、たとえば、アダム・スミスの『国富論』とかホップズの『リヴァイアサン』とかなのですが、そういうものがあることは、もうわかっています。こういう一流品はわかっていますが、二流、三流品はわかっていないということが、書誌の必要を生む。あるいは一流品についても、こまかくいえばいつ初版がでて、それがどのようにあとの版にうけつがれたか、あるいは変更されたか(出版禁止や削除や地下出版や注釈版など)ということになれば、書誌が必要になります。ですけれども、ぼく自身の感じでいえば、原資料をさがすために書誌をつかうのは、大体二流、三流のばあいです。」(『社会科学ドキュメンテーション：社会思想史研究と書誌』一橋大学社会科学古典資料センター, 1983. pp. 1-2 (一橋大学社会科学古典資料センター Study series, no. 4))

名古屋大学の中央図書館所蔵の西洋古典籍は、以上のような収集のされかたをしているため、西洋古典籍の目録作成は、ESTCに収録されてなかったり、ESTCの書誌と識別・同定できない版本や、ホップズの著作でも、Macdonald & Hargreaves<sup>31</sup>にないものがあるなど、一筋縄ではいかない。版や刷の違いの識別・同定のために、目録データとして記述できることは反映さ

せてきたつもりであるが、永井文庫、水田文庫、ホップズ・コレクションの一部や最近受け入れた文庫外貴重書以外は、まだ整備されていない。

#### IV. 今後の課題：研究情報のために

以上が筆者が主として図書館の職員として体験した事例の一部であるが、版や刷の違いの識別・同定のために記述する目録データ（特に校合式や特殊な参考書誌）を、一般の大学図書館の目録担当部署で、特殊な版や刷の違いを調査し、目録に反映させることは、日常業務の性格上、困難なことも多いと思われる。目録作成過程での研究者との協働を提案したい。

本稿でも、調査しきれず、確定できないことがいくつかあったが、できる限り目録に記述したので、研究者による今後の調査を期待する。

現在、国立情報学研究所が提供している CiNii の書誌データでは、準拠している目録規則に限界があり、情報が不十分で識別が難しいケースが少なくない。西洋古典籍の目録作成の規定を少し整備する必要があると考える。さらには、研究情報として必要な書誌データについても検討できるとよい。水田教授は、前述の『アダム・スミスの蔵書』を編集する際に、著者の職業・地位を示すことばは、省略するとしたが、これは記述する方がよかったのではないかと思うと筆者にもらされたことがあった。目録規則でも通常、著者の職業・地位は記載しないので、検討してもよい書誌データの一例かと思う。また、書誌データと画像データベースとのリンクも望まれる。

#### おわりに

振り返れば、西洋古典籍を身近に感じる図書館員生活を送ってきたが、2009年度に名古屋大学が水田文庫を購入したのをきっかけに、定年退職後、研究員として水田教授ご夫妻が旧蔵された貴重書の整備のみならず、画像データベース化のプロジェクトの協力をさせていただくなど、経済学部図書室在籍中の20歳代のときに書誌というものに興味を感じ、将来こんなことができればとぼんやり思っていたことが実現したように思う。

西洋古典籍の世界に少し首を突っ込んだ体験を、このたびのミニ・シンポで発表し、この原稿を執筆する機会を与えてくださった長尾伸一先生、水田文庫の貴重書目録作成の折に助けてくださり、このシンポでもご一緒だった高野彰さん、松波京子さんに厚く御礼を申し上げる。

また、コロナ禍のなか、原稿執筆のための調査にご配慮くださった名古屋大学中央図書館の皆様、とりわけ調査も助けてくださった図書情報係の皆様感謝の意を表したい。

2010年度以来、西洋古典籍整理を通じて、どれだけ多くの皆様のお世話になったか数えきれない。この場をお借りして、御礼申し上げます。最後になってしまったが、水田文庫整理担当に抜擢してくださった水田洋先生には御礼の申し上げようもない。ありがとうございました。



## 注

1. 川原和子さん(1928-1998)は、津田塾専門学校外国語科卒業後、1950年に名古屋大学経済学部助手として採用され、1964年からは経済学部図書掛長、1984年に附属図書館学術情報課図書館専門員に昇任し、1988年に定年退職。その間、経済資料協議会で活躍し、1976年11月～1977年10月まで、ハーバード大学で西洋古典籍の研修を受ける。その成果「欧米貴重書図書館の慣行」(一橋大学社会科学古典資料センター, 1985. 一橋大学社会科学古典資料センター Study series, no. 9)で、1986年国立大学図書館協議会賞受賞。退職後は、三重大学で非常勤講師を務めたが、1998年病没した。詳細は、川原さんを追悼する会編・刊行『女性司書の足あと：回想の川原和子』2008を参照。
2. 永井義雄名古屋大学名誉教授の近代イギリス経済学史・社会思想史関係の旧蔵本。貴重書指定されている西洋初期刊本は約850冊。永井教授から直々に蔵書を寄贈したいとお話があり、牧村情報管理課長(故人)とたびたびご自宅に伺い、搬出にも立ち会った。簡単な概要は、中井えり子「永井文庫(近代イギリス経済学史・思想史)について -概要と保存対策-」『名古屋大学附属図書館報 館燈』no. 166, Feb. 2008, pp. 6-8を参照のこと。  
<https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/kanto/kanto166.pdf> (cited 2022-3-29)  
名古屋大学附属図書館2008年秋季特別展「西洋近代思想と永井文庫：最大多数の最大幸福を求めて」と題する展示会が2008年10月に開催された。図録は下のURLで参照できる。  
[https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/event/tenji/2008aki/zuroku\\_200810.pdf](https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/event/tenji/2008aki/zuroku_200810.pdf) (cited 2022-3-29)
3. 水田洋教授と水田珠枝教授の旧蔵書。1850年以前刊行の西洋初期刊本(図書・雑誌)および、主として1850年以前の西洋社会思想史に関する著作で1851年以降の一般研究書(和洋図書)で構成される。西洋初期刊本は、貴重書指定され、2,489冊が中央図書館に収蔵されている。名古屋大学附属図書館HP「貴重書・コレクション」(<https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/guide/collection/collection.html>)の「水田文庫」を参照のこと。
4. 中井えり子『水田文庫概要』名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室, 2013
5. Nakai, Eriko, ed.; preface by Tatsuya Sakamoto. *The Mizuta Library of rare books in the history of European social thought : a catalogue of the collection held at Nagoya University Library*. Tokyo: Edition Synapse; Abingdon: Routledge, 2014.
6. Nakai, Eriko and Matsunami, Kyoko, eds. *The Mizuta Library of rare books in the history of European social thought : a supplementary catalogue of the Nagoya University Library collection, including the catalogue of Mizuta Tamae Library of rare books*. Nagoya: School of Economics, Nagoya University, 2021.
7. 福田名津子「名古屋大学附属図書館所蔵のジュネーヴ版『百科全書』の鑑定について」『名古屋大学附属図書館研究年報』4, 2006.3. pp. 45-52
8. 水田洋「アメリカ革命の導火線」『知の商人』筑摩書房, 1985. pp. 80-86
9. Bond, W.H. (William Henry). *Thomas Hollis of Lincoln's Inn : a Whig and his books*. Cambridge [England]; New York: Cambridge University Press, 1990. pp. 62-64. (The Sandars lectures in bibliography)『オシアナとその他の作品集』については直接言及していないが、ハリントン、ミルトン、ネダム、シドニー、ロックや、ウォリスの『英文法』のような自由について書いた本を広く流通させたことがp. 108に書かれている。
10. ニュウカム・キャップに言及した水田教授の論文で気がついたものを下に掲げた。  
・「スコットランド啓蒙と市民革命」(田中正司編著『スコットランド啓蒙思想研究：スミス経済学の視界』北樹出版, 1988. pp. 277-301 所収)



- ・『アダム・スミスの蔵書』一橋大学社会科学古典資料センター, 1989. pp. 22-23 (一橋大学社会科学古典資料センター Study series, no. 19)
  - ・「アダム・スミスの蔵書」『日本學士院紀要』55(1), 2000. p. 6
  - ・「蔵書について」『象』66, 2010年春. pp. 2-11
  - ・「はくの思想形成と蔵書形成」『名古屋大学附属図書館研究年報』9, 2010. pp. 49-50  
<https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/12707> (cited 2022-03-28)
11. Rothschild, Nathaniel Mayer Victor Rothschild, Baron, 1910-1990. *The Rothschild Library : a catalogue of the collection of eighteenth-century printed books and manuscripts*. Cambridge: Privately printed at the University Press, 1954. v. 1, v. 2. pp. 543-544
  12. スウィフト作, 深町弘三訳『桶物語 書物戦争 他1篇』岩波書店, 1968. p. 266 (岩波文庫)
  13. モレリ [著], 鈴木峯子訳「バジリアッドまたは浮き島の難破」『共有のユートピアと科学のユートピア』岩波書店, 1997. pp. 323-324 (ユートピア旅行記叢書, 13)
  14. McEachern, Jo-Ann E. *Emile, ou de l'éducation*. Oxford: Voltaire Foundation, Taylor Institution, 1989. (Bibliography of the writings of Jean Jacques Rousseau to 1800, 2)
  15. 坂倉裕治, 隠岐さや香, 松波京子「名古屋大学所蔵『エミール』パリ版初版本について」『名古屋大学附属図書館研究年報』15, 2018.3. pp. 13-17; 坂倉裕治「ルソー『エミール』の初版本認定指標」『名古屋大学附属図書館研究年報』15, 2018.3. pp. 1-11; 高野彰「『エミール』初版(パリ版)のタイトルページの印刷」『名古屋大学附属図書館研究年報』16, 2019.3. pp. 1-9; 松波京子「西洋古典籍の書誌学的研究成果と図書館総合目録への反映 ―現状と課題について―」『書物の記述・世界の記述: 書誌が描く18世紀啓蒙の世界』一橋大学社会科学古典資料センター, 2020. pp. 43-53 (一橋大学社会科学古典資料センター Study series, no. 76)
  16. 高野彰「折丁: その要件」『名古屋大学附属図書館研究年報』18, 2021.3. pp. 1-9; 「James Burgh の Political disquisitions (1775)」『名古屋大学附属図書館研究年報』17, 2020.3. pp. 1-6; 「トマス・ワレン: 『リヴァイアサン』(ヘッド版)の印刷者」『名古屋大学附属図書館研究年報』13, 2016.3. pp. 1-17.
  17. 高野彰『洋書の話』第2版, 朗文堂, 2014  
 印刷機(者)番号については, pp. 82, 166-170を, 異刷については, pp. 192-200を参照のこと。
  18. [https://books.google.co.uk/books?id=FAReAAAaAAJ&printsec=frontcover&hl=%20%20ja&source=gbs\\_ge\\_summary\\_r&cad=0#v=onepage&q&f=false](https://books.google.co.uk/books?id=FAReAAAaAAJ&printsec=frontcover&hl=%20%20ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false) (cited 2022-03-28)
  19. 文部科学省: 科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「データベース」名古屋大学附属図書館所蔵 ホップズ・水田コレクションデータベース, 委員長: 長尾伸一(課題番号: 17HP8042)
  20. 加藤龍太郎「コウルリジの書き込みがある希本『蜜蜂物語』」『中日新聞』1972年12月1日夕刊
  21. 水田洋「蜂の寓話のコールリジ所蔵本」『館燈』1973.2.15. p. 133
  22. Samuel Taylor, Coleridge, 1772-1834; George Whalley, ed. *Marginalia*. v. 1-v. 6. London: Routledge & Kegan Paul; Princeton: Princeton University Press, c1980-c2001. (The collected works of Samuel Taylor Coleridge / general editor, Kathleen Coburn; associate editor, Bart Winer, 12)(Bollingen series, 75).
  23. 中井えり子「コールリジが所蔵した『蜂の寓話』(ウチの図書館お宝紹介!『図書館雑誌』95(6), 2001.6. pp. 428-429)
  24. グリーンの著作に, *Spiritual philosophy : founded on the teaching of the late Samuel Taylor Coleridge*. London; Cambridge: Macmillan, 1865. v. 1, v. 2. があり, 弟子の Sir John Simon (1816-1904) が, 冒頭でグリーンの回想録を書いている。グリーンは, 1817年頃という早い時期にコールリジに出会ったようだ(v. 1, p. xxxiii)。

25. このことは、*Marginalia*. v. 3. p. 811 (The collected works of Samuel Taylor Coleridge, 12) に Green SC (1880)457 と記載があり、これは略語解説 (Abbreviations p. xxii) に、*Catalogue of the Library of Joseph Henry Green ... Sold by auction* (Sotheby Jul 1880) とにあることからわかる。しかしこのカタログの書誌は、BL でも検索できず、唯一 WorldCat でみつかった次の書誌データが正しいと思われるが、未見である。
- Sotheby, Wilkinson & Hodge.
- Catalogue of the library of the late Joseph Henry Green Esq. F.R.S.D.C.L. &c. : comprising a valuable collection of metaphysical, philosophical, theological, and miscellaneous writings : comprising many volumes enriched with the autograph notes of S.T. Coleridge, the poet and J.H. Green, including Coleridge's manuscript note book ... and other standard works in all classes of literature : which will be sold by auction by Messrs. Sotheby, Wilkinson & Hodge ... at their house ... on Tuesday, the 27th of July, 1880, and the two following days, at one o'clock precisely ...* [London]: Dryden Press, [1880]
26. 『コールリッジ書誌』は私家版として限定 330 部印刷され、そのうち 30 部が大型本である。水田文庫の貴重書外に収蔵されている版本は、No.5 がついているが、サイズは 25cm で大型本ではない。(309.02||Mizuta||0455 資料 ID:41496616)
27. John C. Francis. *Notes and queries*. Ser. 9. London, Sept. 20 1902. p. 231
28. 『蜂の寓話』の初版から 3 版までは、すべて 1 巻本で、1734 年に London から、1772 年に Edinburgh から 2 巻本が出版されている。注 25 の *Marginalia*. v. 3. p. 811 (The collected works of Samuel Taylor Coleridge, 12) でも 2 vols. となっており、どこかで混乱していると思われる。
29. Knox, Collie, 1899-1977. *It might have been you*. London: Chapman & Hall, [1938]. p. 404. 1930-40 年代に活躍したジャーナリスト、コリー・ノックスの自伝でクリストファ・ストーン夫妻を訪ねたことが記載されており、サセックスにある Wiston Old Rectory と書かれている。
30. 安藤隆徳 「The Mizuta Library of Rare Boos in the History of European Social Thought : a Catalogue of the Collection held at Nagoya University Library, edited by Eriko Nakai; & preface by Tatsuya Sakamoto. Edition Synapse, Routledge, 2014, xxxv+315 pp.」 『経済学史研究』59(1), 2017. pp. 97-98.
31. Macdonald, Hugh, and Hargreaves, Mary W.M. *Thomas Hobbes : a bibliography*. London: Bibliographical Society, 1952. ホップズ (Thomas Hobbes, 1588-1679) の個人書誌で、1725 年までに出版されたホップズの著作と 1700 年までに出版されたそれらの翻訳本が掲載されている。

高野 彰

(元跡見学園女子大学教授)

Former professor, Atomi University)

中井 えり子

(元名古屋大学経済学研究科研究員)

Former researcher, Graduate School of  
Economics, Nagoya University)

長尾 伸一

(名古屋大学名誉教授)

Professor emeritus, Nagoya University)

---

---

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 80*

発行所 東京都国立市中 2 - 1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 2022年9月30日

---

---

